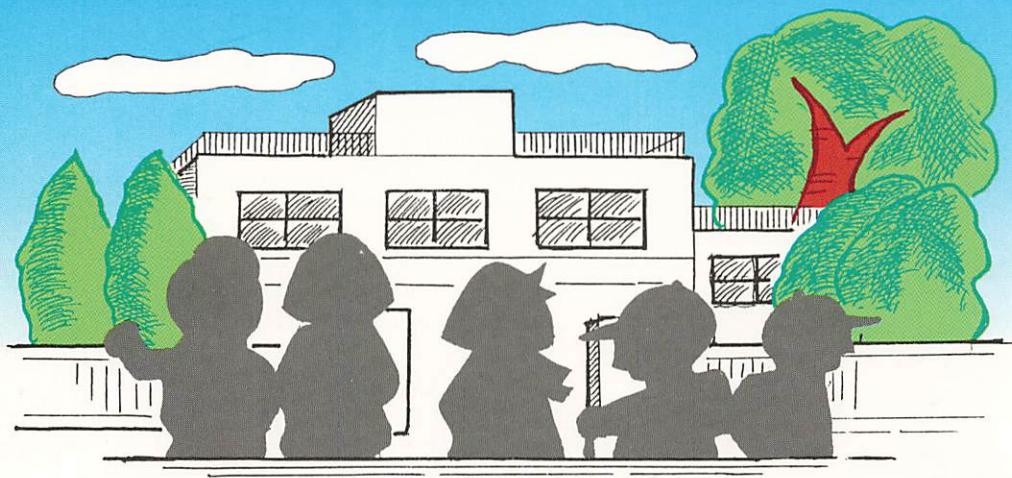


教文研教育シンポジウム記録

# 不登校をめぐって

—— 子供の心を探りよりよい対応を考える ——



神奈川県教育文化研究所



92.2.29

## シンポジスト

・菅 龍一

(児童文学作家・和光大学講師)

・竹内 直樹

(横浜市立大学医学部  
小児精神科助教授)

・永田 實

(横浜市立舞岡中学校教諭)

・コーディネーター

・林 洋一

(白百合女子大学助教授)

1992年2月29日(土)

於：相模原教育会館

○司会 それでは定刻を五分ほど過ぎましたので、第一回の教文研教育シンポジウムを開催させていただきます。私は全体の司会を務めます教育文化研究所事務局長の谷口と申します。よろしくお願ひいたします。

それでは初めに、主催者であります神奈川県教育文化研究所の倉持巳佐男所長より皆様にごあいさつ申し上げます。

## あいさつ



○倉持 皆様今回、土曜日の午後、何かとご多用の中、多数ご参会いただき大変ありがとうございます。

ご参会の皆様に心から敬意を申し上げたいと思います。

本日のテーマは、ご案内のように、"不登校"でございますが、この言葉は、昭和三十年代には「学校恐怖症」と言わされておりました。以降、「登校拒否」と言われるようになってきております。

私どもは、その「登校拒否」と言われている子供の心のありようから、「登校拒否」よりも「不登校」の方が適切ではないかということで、こういう呼び方をいたしております。

昨年十二月に発表されました文部省の「平成二年度問題行動白書」を見ますと、全国の公立小・中・高におきまして、いわゆるいじめは減少してきているけれども、校内暴力、登校拒否の件数は年々増加をしてきていることが明らかにされております。

具体的には、文部省の言つ登校拒否について申し上げますと、平成二年の学校基本調査の数字によつて国公私立小・中合計で四八、一三三七人に達しているというふうに述べております。この数字は、昭和六十年の三一、九九七人と比べますと、約六十六%の増加であります。

私どもの県教育文化研究所では、事業の一つといたしまして、電話教育相談を十年前からやつてきておりますが、昨年の四月から本来の一月までの、八月を除く九ヶ月の受け付け件数は二六一件でございます。相談内容の種別は十七項目に分かれておりますけれども、その中で最も多いのがこの不登校問題で、これが七十三件となつております。これは全体の三十%に及ぶ数でございます。相談者はすべて母親でございます。

不登校に陥つた直接のきっかけは、友人関係、あるいは教師との関係、学業不振、クラブ・部活動への不適応、親子関係をめぐる問題等々、極めて多岐にわたつております。

また、不登校の子供の対応もさまざまですが、最近の特徴として挙げられているのは、小・中ともに不安など、情緒的混乱の形、無気力の形、これが上位を占めていることが報告をされております。

現在、不登校は学校教育におきまして、子供の心にかかる重大、かつ緊要の問題となつております。いろいろの原因、きっかけ、対応があるにしましても、不登校とは、子供が学校へ行かなければならないという自覚を持ちながらも、当人にとってのつづきならない理由があつて、内心では、学校へ行きたくない気持ち、行けない気持ちが強く、いろいろ葛藤の後、結果として学校へ行けない状態であるという認識を、私どもは持つております。

まず、何よりも子供の心を知る、理解するという基本に立つて対応を考えることが重要であろうと思ひます。

こうした趣旨から本日のシンポジウムを開催をいたしましたわけですが、シンポジストの先生方

のお話をもとに、皆様方の体験、お考え、ご意見を発表、交流していただき、限られた時間ではござりますが、実り多い会となりますように心から切望をいたしまして、ごあいさつにかえます。  
ありがとうございました。（拍手）

○司会 続きまして、本日のシンポジウムの後援もいただいております、相模原市教育委員会の学校教育部長の芦野鐵男様からごあいさつをいただきたいと思います。



○芦野学校教育部長 ご参会の皆様、ご苦労さまでございます。

神奈川県教育文化研究所の肝入りで、不登校にかかわります問題につきまして、こうした学習の機会を設定いただきましたこと、大変私どもといたしましても、うれしいことに存じております。

相模原市におきましても、この不登校の問題は大きな教育課題でございます。日々、それぞれの学校で、この問題について保護者の方々とともに手を携えて、先生方に懸命の努力をしていただいております。

そうした中で、昭和六十年、本市では「相談指導学級」を設置いたしまして、今日まで七年間の中で、おおよそ百余名の子供たちが自立のための学習に取り組んできているわけでございますが、まだまだ引きこもりの子供たちへの手がなかなか差し伸べられないということで、平成三年度からは学校外のマンションの一室を借りまして、適応指導教室「銀河」と呼ぶ教室を開設をいたしました。現在、十八名でしようか、在籍をして学んでいるわけでございますが、このことで問題の解決ができるいるわけではございません。

過日も、市内のある小学校の校長先生とお話を機会があつたわけでございますが、その学校に

何人かいる不登校の子供に学校の先生方が一致した姿勢で、父母の方と手を携える中でかかわり、働きかけをしていく中で、見事な成果を上げることができたというお話で、大変感動的なお話であったわけですが、その校長先生がおっしゃるのに、「子供の顔をいい顔にするのが教育だと思いますよ」という大変示唆に富んだ表現なんですが、拒否症状を起こした子供の表情が晴れやかであるはずはないわけでございまして、それを克服した子供たちの顔が全くすばらしく輝いて見える。そういう子供の顔にしていくことが私たち教育に携わる者の務めなんだろうということを、そうした経験の中でしみじみとおっしゃっておられました。

本日、四人の先生方のさまざまご提示を拝聴させていただく中で、私どもも、ともどもにいい顔の子供をつくる、そういう日々の取り組みを改めてしていかなければならぬというふうに感じております。

私にとりましても、またとない学習の機会とさせていただくつもりでおります。

本日は、シンポジストの先生を初め、ご参会の皆さん、本当にありがとうございます。よろしくお願いをいたします。

言葉が足りませんが、教育委員会のごあいさつとさせていただきます。（拍手）

○司会 それでは、シンポジウムの方に移りたいと思います。

ここから後は、当研究所の研究評議員、そしてまた教育相談室の相談員をしていただいております、白百合女子大学助教授の林先生にお願いして進めさせていただきます。よろしくお願ひします。

## シンポジウム



○林（コーディネーター） ただいまご紹介いただきました、白百合女子大学の林と申します。

本日は、「不登校をめぐつて」ということで、サブタイトルが「子どもの心を探りよりよい対応を考える」。このシンポジウムの司会・進行を務めさせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

それでは、早速、シンポジストの先生方のご紹介をさせていただきたいと思います。

まず、一番最初にご発言をいただきますのが、永田實先生です。（拍手）

永田先生は、横浜市立舞岡中学校の教諭という立場でおいでいただいているわけですが、特に相談指導学級担当ということで、不登校の子供たちへの対応ということに、大変深い経験を持つていらっしゃる先生であります。

続きまして、竹内直樹先生をご紹介いたします。（拍手）

竹内先生は、精神医学の立場から不登校の問題についてお話しitただくことになつております。

さらに続きまして、菅龍一先生をご紹介いたします。（拍手）

菅先生は、お手元のプリントですと、児童文学作家・和光大学講師というふうになつておりますけれども、元神奈川県下の定時制高校の先生をなさつております。子供の不登校の実態等についても

大変よくご存じの先生であります。

それからもう一方、私の横におります広瀬隆雄先生をご紹介いたします。（拍手）

広瀬先生は、神奈川県教育文化研究所の研究評議員で、特に今回は教育学の立場から指定討論をお願いしたいということで、おいでいただいたわけです。

それでは、早速であります、永田先生、よろしくお願ひいたします。



○永田 私は、ずっと中学校の教員をやつておりますが、不登校の子たちとのつき合いということでは、かれこれ二十五年ぐらい、ほぼそういうことにかかわつてまいりました。何で中学校の教員がそういうことにかかわってきたかということで、話せば長いことになりますけれども、今、大変不登校がふえておりますけれども、昭和三十年代の終わりごろに大変非行がふえた時期がありまして、そのころに横浜市教育委員会で、「専任カウンセラー」というふうに当時呼びましたけれども、教員でいながら学校の立場にしばられないで子供や先生や、親の相談を受けていく仕事をやつてみないかとすすめられ、教員自身がそういうことを少し勉強して、教師としてそういう仕事に当たつてみることが制度化されました。

教員というのは、その中の一員ということで縛られてしまうことがあつて、そのことが大変子供や親にとつては、一つの枠になつてしまふので、できるだけフリーな立場で、肩書き抜きで接していくことがないとダメだということ。しかも、学校というところは、私も長年住んでおりますが、やっぱり独特な社会でございまして、その中で言葉を通じて話していくということは、学校教員という体験を十分に持つてないとならないというところがあるんだと思います。

これは学校だけではなくて、日本の会社とか、そういうところもそういうところがあるのかもしれません。それが今アメリカやE.C.あたりから「日本独特の何とか」というふうに言われていることで、そのおかげで大変教育も、経済も大発展を遂げてきたということはあるんですが、それは逆に、人間にとつてのある種のひずみを起こしてきていることもたくさんあるのかもしれません。

そんなことで、私がフリーのカウンセラーのような仕事で学校を回り歩いていくときに、非行を起している子たちとも大変楽しいつき合いができました。と同時に、既にそのころ、昭和三十年代の後半から四十年代にかけて学校に行かない子たちで、そのまま一年も、二年もほうり放しになつているという子たちがいて、そういうところの家庭訪問をこつこつして回りました。

そういうことではたくさん印象があるんですけども、そのころから学校の先生とわかつちやうと、そういう子たちはピシャッととびらを閉ざして、部屋に駆け込んで、押し入れとか、トイレとかに隠れてしまうということがあつたわけです。ただ私、顔を知らないからひょつこと訪ねていくと、学校の先生でないと子供たちが会ってくれるという事実が沢山ありました。

逆に、子供の方から聞いてみると、学校の先生が来るというのは、予知能力というか、予感でわかる。大体五十メートルぐらいまで近づいてくると、何となく胸騒ぎがしてきて、ということをいいます。不思議に学校からかかってくる電話も予知できるそうです。「あれは学校の先生がかけているに違いない」というので、そういうのには出ない。

大変神経のとぎすまされた状態のときには、人間というのはそういう感覚もしつかりできてくることがあるんだと思うんです。

一体、それほどに神経をとがらかせてしまう学校というのは何かといふことも、そのころからいろいろ思いめぐらしていましたけれども、子供とつき合つていきながら、子供が学校の先生でも、我々

でも行つたら、「学校に行きなさい」「学校に来なさい」ということを前提で、たとえ笑顔をつくつたつて、それが腹の底に見えて「いる」ということがあるんだと思う。それでピシャッと閉めてしまうんだと思ひます。

そういうことを裏返して考へれば、学校の先生は子供のところに家庭訪問で何をしにいくのかといつたら、やつぱり何とか早く学校に来なさい。このごろは教育委員会やなんかの研修を受けてきて、余りそういうふうにストレートに言うといけないというので、「無理して来なくてもいいよ」と表現は変わつてきているけれども、気持ちの中では、それはやつぱりあるわけです。

これは当たり前だと思つてます。それは責めることではないんですけども、子供については、そのことは苦しいことだということを、私もたくさん思い知らされました。

子供は、学校に行かなきやいけないとか、どうしたら行けるだろうかという思いは持つております。それなのに「行く気がない」「怠けている」「意思が弱い」「ちゃんとしてない」ということを、たたかれることによつて非常にかたくなにというか、もうそういうところとは関係を持ちたくない。引きこもつていていきたいということを強めていくことを随分しているんだろうと思ひます。

なぜそくなつてしまふのかとか、その内面とか、いろんな問題については、この後の先生たちがいろいろお話しくださると思います。私は、いろんな子供たちとの出会いを思ひますけれども、ある子のところに、十何回家庭訪問して通つていて、とりとめない話をしていく、何かちょっと話が進展しないなという思いがあつたある日、きょうはちょっと様子が違うなと思つていましたら、子供が「いつも来てくれるけれども、いつまで僕とつき合つてくれるつもりがあるのか」ということを切り出しあきました。「僕は、ずっとこうやつて訪ねてきて、君とのつき合いは続けるつもりだよ」というふうに言ひました。「それなら、きょうから僕は自分のことを話をする」と言ひました。「今まで悪いけど、

先生を試していたんだ。どうせ来てくれるけど、それは仕事だから来ているんだろうと思つていた」ということで、その日からその子は、自分が学校に行けないことがどれだけつらくて、そして夜も眠れないで、どう過ごしているか、どういうことを思つてているかということをポツポツと語つてくれるようになりました。

つまり、その間、私がテストを受けていたわけです。教師は子供にしょっちゅうテストをしています。しかし、教師も子供にテストをされているということは、教師も気がついてないし、親も子供をテストしていることが多いんだろうと思います。

その中で子供というのは、親とか教師とかという外枠とか、肩書きを抜きにして何を求めているのか。やはり友だちがいないということは常によく言うことですけれども、それを広げてみると、本当に心を開いて触れ合う大人や友だちに出会つてくることがなかつたというのが、「そういう場所じやないところにいく意味はない」ということを引き起こすんだろうと思います。

そういうことを考えに置かないで、「なぜ学校に来ないのか」、そういうことでのいわば原因追求みたいなこと。悪く言つてしまえば、取り調べみたいなことをソフトにやる。原因がわかれば、それはつきりするのかと、これは後のお話でまた出てまいりますけれども、それはそんな簡単なことじやないということです。子供の気持ちの中にあるいろいろな複雑な思いというのは、そんな簡単なことじやないと思います。

しかし、私が数多く見てきたことの中で言えば、教師側の発想というのは、集団に参加できないといふのはだめじやないかということがまざりますね。そういう子はだめな子であるということがあります。

集団に参加できないのはどうして参加できないんだろうか。あるいはできない子がだめな子なんだ

ろうかということを問い合わせてみる必要があるんだろうと思います。

つまり、学校に行けないということがイコールだめなことなのかどうか。ある時期にこういう条件のもとでは行けないということを考えてみなきやいけないわけで、その子たちがずっと最初から、小学校一年生から、最初から行かなかつたわけではないわけです。その辺の子供の心の動きということをやっぱり考えてみないといけないです。

もう一つ、教育というのは何をすることなのか。学校の先生からすれば、とにかく学校に来なきや教育のしようもない。そこは連れて来るまでは親が厳しくガンガンとやらなきやならないということがよく話題に出ます。

教育というのはもともと何なんだろうか。これは学校に行かすことをもつて教育とするということではないだろうと思います。その子供自身がどれだけ豊かに、それこそ顔色が輝いて、そうやって一人の人間として成長していくか。それを助ける仕事。その助ける仕事は、学校の教室でしかできないのかどうかということまで問われてくることだと思います。

子供は、学校ということ以外の中でも育つていくわけです。そういうことでは、むしろ教育の古典と言えるルソーの「エミール」なんていうものは、そういう視点から書かれていて、教育とは何かというのではなく、そういうまだ学校なんかが組織化されていなかつた時代、既に人類五千年、八千年の歴史の中ですつと行われてきたこと。学校という制度をとつてきてからたかだか二百年。日本の中ではまだ百何十年ということにしか過ぎません。

それ以前にも人は豊かに育つていた。現代よりももつと豊かに育つてきた時代をたくさん私たちは知っているわけです。

その中で私たちは、休んでいる子供も教育を受けていく、何かを学んでいく、自分の心の栄養素と

して含んでいくことは何かあるはずだと考えていいきたい。それは例えば子供の家に訪ねていくことで、その仕事をすることもできるはず。だから、「学校にいらっしゃい」というために家庭訪問をするのではなくて、その子供の家に行って、その子供とそこで会うこと。教師が何かその子に栄養を与えることができるならば、それは教師が臨機応変にできるはずだというふうに思います。

一对一という触れ合いの中から初めて教師が持っている教育とか、あるいは大人が伝えたい、親が持っている何かというものはそこから始まるんだろうと思います。そこが切れている状態の中で、いかに揺さぶろうが、ひっぱたこうが、問題は解決しない。今、ひっぱたくという表現をもつて体罰ということを思いますけれども、体罰がどうしてこれだけ問題になつてくるのかといつたら、接点がないところでどんな暴力をふるおうが、それは何の意味も持たないわけです。逆に言えば、我々の経験、我々自身も、私自身も体罰を受けてきた経験があります。だけど、振り返ってみると、ときには、多分親なり、教師なりと回路が通じていたところがあつたからなんだろうと思います。

だから、回路を通じるためにひっぱたくんだとか、あるいは暴力はいけないから言葉でどうこうといつたような、岐路にいつて、人間が何だということが見えない状態の、基本をずれた論議が多過ぎるんだろうと思います。

とにかく休んでいる子供にとつては、学校というのがとつても重たくて大きい存在に思えてくる。そこに行かないと自分の人生がなくなつてしまつというふうに思う時期があります。これは本人もそうです。親もそうです。

私は学校の中にいて、学校という存在はそんなに大きいもんなんだろうか。確かに日本の学歴制度というのは崩れおりません。どういうふうに変形したかというと、東大をトップとする極端な鋭角三角形の形は崩れました。しかし、逆に言えば、非常に鈍角な形で、すそ野が広がっている。高校を

出ていなければ一人前じやないという社会状況がますます広がっております。

こういう社会状況は、学校依存型の社会状況は、日本の社会はいまだに変わつております。すべてのことが学校教育の中に求められるという時代は、なお変わりません。これがこれから問題になつてくる学校五日制の問題についても、議論を見ていると、「とんでもない」という意見がまだ多数を占めているという状況からも見られると思います。

そういうことの中で、子供にとつて学校というものをもつと相対化してあげる。小さくしてあげる。それよりも大事なのは自分なんだ。自分の生き方なんだ。自分の存在なんだということをどうやつて伝えてあげられるか。これは親の仕事でもあります。人々の、社会全体の仕事でもあります。ただ私は、教師がそれを自分の子供にどう伝えることができるか、語れるかということについて、やっぱり問い合わせみたいと思うんです。

さつき申しましたように、子供たち、こういうふうに不登校になる子たちの多くは、小学校時代、そのあたりのところから、いい友だち、いい先生にめぐり合つております。逆に言えば、そういうめぐり合いがあつた子たちは、ある時期休むことがあつても、かなり早く違う歩き方を始めます。

だから、教師というのは、どんな存在なのか。日本社会の独特な問題があると思います。私は、アメリカから帰国した子供で不登校になつた子供からやはり言わされました。私も日本の教師の端くれですから、同じことをやつてしまふんです。「将来どうするの」と言つたら、「私、漫画が好きだから、漫画を書いてやつていきたい」。僕は平均的な日本の教師として「漫画かいて一生やつていくというのは大変だよ」と言つたら、ピシヤッと、「どうして日本の先生は、個人のそうやつた生き方に口出しをするんですか。アメリカでは、私はそういう経験は一度もなかつた。自分が漫画が好きで漫画をやつていこうということに対し、それは個人に対する干渉でしょう」。

私たちには考えてみると、進路指導とか、いろいろな名目でもつて子供の生き方に對して大変なおせつかいと世話やきをしていると思います。不登校になる子たちは、親たちが過保護だとか、過干渉だとかという議論がずっと続いております。それは事実かもしません。しかし、私は、教師がそういう言葉を親に向かつて言つたときに、自分たちはそういうことをしてないのか。余計なことをしてないのか。「勉強しなさい」とか、「テストがあるよ」とか、「宿題をやつてこないとどうとか」「ハンカチを持ってきているか」とか、「つめがどうとか」ということも含めて、それは子供のしつけだということを言いながら、どこが子供にとつて生きしていく上での大事な部分で、その部分については過保護であつたり、過干渉であつたり、子供が非行化しないために手を出し過ぎて、レールを敷いていることがたくさんあり過ぎやしないか。子供の生きしていく力を育てていく。その教育という仕事は何なのかということについて考え方があります。

不登校の子は弱いとか、意思薄弱だとかと言われますけれども、私の話なんかを受けつけてくれない、そういう意味のしたたかさというか、強さというものを思います。「学校に行け」と言つたら、はつきり言えば、行つた方が楽だと思います。それを自分の生き方として行かないということを、しつかりある期間持つてることに對して、それを受けとめなきやならないと思います。

早く行く子はいい子で、いつまでもぐずぐずしている子はだめな子で、これはそういう価値観は外して考えてみなきやいけない。

そういうところの中で改めて私は不登校の子たちが自分らしく生きていくということで、それを摸索していく、自分らしく生きていく道を見つけることになれば、ある期間学校を休むということが、その子にとつて果してマイナスであるかどうかというのは、もつと広い視野で考えなきやならないだろうと思います。

時間ですので、まとめて言うと、私は、教師のサイドから考えてみると、集団に参加できなければだめだ。あるいは初めに集団ありき、そこに入れない子はだめだ。あるいは集団でなければ教育活動はできないという前提をもう一回疑つて考えてみる必要があるだろう。そういうことをとりあえず私のポイントとしてお伝えしたいと思います。

以上です。

○林 どうもありがとうございました。

さまざまな立場から不登校の問題について、長い経験を通して貴重な示唆をいただいたかと思います。簡単にまとめてみますと、例えば教師という肩書き抜きで不登校児と本気になつてつき合つことが非常に大切であるとか、あるいは教育とは何かという根本的な問題をやはり見直す必要があるとか、あるいは休んでいる子供にも学ぶことはあるんじやないか。

つまり、学校に行かせるために家庭訪問するのは誤りではないか。あるいは日本の社会が余りにも学校に依存しているのではないか。

こういった点につきまして、さまざまな示唆に富むお話を伺えたのではないかと思っております。それでは続きまして、竹内先生、よろしくお願ひいたします。



○竹内 小児精神科医の立場から三つの話をさせて頂きます。最初に「見えない心を大切にすること」次に「連携することについて」最後に「不登校の子供への援助」というテーマで話を進めたいと思います。

最近は不登校が話題になることが多いのですが、それが使い古された流行語で終わってしまうのではないかという危惧を抱いております。あるいはその当時者である子供の心とはかけ離れた言葉にも聞こえます。あえて言わせていただくと、「不登校」をどのようにするかということよりも、もっと大切なことに目を転じていただきたいのです。それは目に見えないもの、言い換えると一人一人の心を大切にできるかということです。例えば不登校は「学校へ行けた、行けなかつた」ということで、その関わりの失敗や成功に早急に結び付けて考えるのではなく、当時者の子供が不登校に際してどのように生きたかを把握することが大切だと思います。

「不登校」の研究をしたある学校で、その研究を進めたら「不登校の数が増えちゃいました」と恥ずかしそうに言われた先生がいました。不登校を恥ずかしいもの、あるいは悪いものと一律に考えることはどうでしょうか。目に見える「不登校」にこだわることは仕方のないことですが、その「不登校」の数よりも、むしろその水面下の、子供の見えない心の部分に焦点を当てていただきたい。あるいは本当に困っている人たちに私たちが優しくできるかどうかということについて考えて欲しいのです。

言い換えれば「目に見えないものを大切にすることの基盤になってしまいます。私たちの世代がお年寄りに優しくできるかどうかという問題にも、あるいは障害を抱えた人たち、心の健康が傷ついた人たち、心の体力をなくした人たち、そのような人たちに私はどのような思いやりが持てるかということにもつながります。また自分自身の心を大切にいたわ

れるかということにもこの文化は関係します。

神経性食欲不振症という心理的なことが原因で食べられない病氣があります。その子供たちはある時期にある事柄にこだわってしまうことがあります。例えば、体重の値、成績の点数、もう小遣いの金額などにひどく過敏になります。それらに翻弄されます。ときには自殺までも試みます。わずかな値の変化に苦しみ、そのようなだらしない自分に絶望してしまいます。目に見える数値しか信用できなくなり、その一方で思いやりや優しさ、あるいは人に愛されているとか心配されているとか、人に委ねるとか、人間らしい心もちや形にならないことは、頭では判つても心では受け入れられないのです。数しか信じられないこのような子供たちは本当にかわいそうです。しかし私たちも経済や科学の発展と共に物が重視された中で暮らすうちに、「見えない心」を大切にできにくいやうな環境になってきたのではないかという気がします。

また心は見えないので一律に考えがちであります。子供の背丈は一律には考えません。背の高い人も入れば低い人もいます。これは当然の事です。しかし身長と違つて心の場合はこのことを当然とは受け止めません。実際には勝気な人もいれば、弱気な人もいます。これも当たり前の事ですが、現実には大人は子供の「心の体力」の違いを認めたがりません。そのように考えると学校という一律の集団の中に、皆が皆通うこと自体少し不自然でおかしい気がします。いろいろな子供がいて当然です。背の低い子供が武豊みたいな競馬の騎手を目指せば問題はないのでしょうか、相撲の小錦みたいな大きな体格の子供が挑戦すれば無理が目に見えます。これはその逆もいえます。そのように子供の心にあつても、心のサイズにあつた社会を選択していけばよいのです。一律の理想のモデルということはありません。

そこで現代の教育に望むことを申し上げます。「不登校」それだけの対応を技術論的に考えることよ

りも、「見えない心」を大切にしていく、あるいは「心の健康」と言えるもの、不登校にいたる前の予防にこそ力点が置かれる時代に来ているのではないかと思います。このような視点に立つと、不登校の子供たちも大切ですが、不登校ではない現在通学をしている子供たちの心も同様に重要になります。その子供たちがやがては大人になり親になり、教員にもなります。そのときに心の問題で立ち止まつたりつまずかなかつた人たちが本当に優しくなれるかどうかということ、言い換えるとそのような文化化が次の世代に伝えられるかどうかが大人たちの使命にもなります。また現在の教育の中でこそそれらを取り上げて頂きたいと思います。登校する子供、できない子供は区別であつて、差別であつてはいけないのです。

次に申し上げたいことは「連携」ということです。

第一に教育と親との連携です。学校の先生と子供が出会うことよりも、親と子供が過ごしている時間が非常に長いという当たり前の事実を考えて頂きたいと思います。そのためにも学校に来られない子供を援助していくためには、家族と学校現場との連携のもちようがきわめて大切になります。この連携をとる際にぜひラベルを貼らないということを心がけてほしいと思います。不登校の家族や親と会うときに、「過干渉だ」「冷たい親だ」「子供の言いなりの親だ」といったラベルを貼つて親に出会つていくということは非常にまずいありかたに思います。目の前にいる不登校の親と、同じ親同士という立場で出合えているかどうかといったことが気になります。何かそこに「不登校」の親といった括弧つきの会いかけをしていないかと気になります。

またこれもときどき耳にすることですが、朝になると登校を済む子供の親に「学校ではすごく元気にしていますよ、心配のしすぎでしょ、出掛けに子供がいきたがらないのは親の対応のせいでしょう」みたいなことを言いがちです。学校へ出てきた子供たちは元気な場合も確かにあるわけですが、

朝の家庭の姿も事実です。一部の子供たちは学校では精一杯のカラ元気というか、子供なりに一生懸命頑張って無理をしていることもあるのです。自分が見ている子供だけが本当の姿ではないということです。子供の心にとつてはいろいろな場所や、そのときの時間や、であう人によって態度や気分を変えることは自然なことあります。カメレオンの皮膚の保護色のように変わるのが子供らしい生き方だと思うのです。恐い先生と優しい先生とではおそらく子供の態度は違うでしょう。これは良い悪いの問題ではないのです。そのように子供の生活圏全体の中で、一人の子供の心をまるごと理解することが必要です。自分自身の目だけを信じることは連携を円滑にさせないことになります。

これは家族を見る目についても同様です。医者や教員は不登校の状況に子供が陥った家族に出会っているのです。これをその家族、あるいは親の全体像と短絡的に受け止めるとき大きな間違いが生じます。学校に行かれなくなった子供をもつた家族、特に親はやっぱり辛いわけです。大変苦しんでいます。それを「親が混乱してはいけません、元気がなくてどうします、元気を出してください」こういう言葉は余計な忠告に私には響きます。このようなことは立場を代えて考えればすぐに判ることだと思います。

次に学校内の連携です。

担任が一人で子供をみていく、あるいは養護教諭がみていくということではなくて、ぜひ連携をもつていただきたい。チームプレーでひとりの子供を見ていただきたい。いろいろ人の目に出会うことは、その子供の個性の発見の際には役に立ちます。子供を見るのは単に教員に限りません。用務員さんや給食に関わる人、あるいはクラスの生徒など、要するに校舎という中で共に暮らし、行き来をする人たちで、ある子供についての「良いところ」「素晴らしいところ」「弱いところ」「気にかかるところ」を見守っていきたいのです。そのためにも交流が大事です。そうすると意外なことに気づいた

り見えなかつたところが見えてくることがよくあります。特に何かにつまづいたり、落ちこぼれかけた子供には、ほめられるべきことや良いことを一杯言葉にして返していかないといけません。そのような子供たちは自信を失っています。いろいろな人からいろいろな言葉でいろいろな角度からほめられることによって、心のエネルギーが与えられて生き延びることが可能になるのです。そのためにもチームでみていくという姿勢が大切です。

ただそのためにも不登校の子供を自分が治してやろうといった傲慢さはつつしみたいと思います。お節介にもなりますし、おこがましいことだと思います。誰が援助の主役になるか、わき役、あるいは悪役になるか、これは大人が決めるのではなく子供が選ぶ事なのです。担任だから主役ということではなく、たまたまのことでも多くは決まります。その子供との相性も重要です。チーム全体を信用して、自分のポジションということをよく理解することが大切です。これは他の言い方をすれば自分の責任と限界を知ることにもなります。教師だからといった硬直した姿勢ではなく、その子供と自分との関係を素直に見つめ直すことが大切です。

チームの主役はできれば子供自身がつとめられたら最高です。援助する側の手柄話に終わる事なく、子供自身が手柄を立てる、つまり「自分が頑張った」「自分は乗り越えた」この実感が、将来の心の危機の際の予防にもなります。不登校に陥った軌跡を話し合うことも大切ですが、心の回復過程の軌跡を子供と一緒にたどることもさらに重要なことです。

連携の話題の最後に、教員と子供との連携の話をします。これは繰り返しの話になりますが、不登校や長期欠席日数は目に見えるものです。そのために担任は「自分の受け持っている間に」何とかしようと、あるいは学期始めや学年末に何とかしようと、余計なことを考えることもあります。子供の心の回復のペースではなく、子供をとりまく教育のペースで考えてしまいがちです。そのような日に

見える欠席日数ではなくて、不登校という日々の生活の質に対し教育的配慮をしていただきたいと思ひます。学校という場所だけでしか教育はなされないとということではもちろんありません。

ある小児病院での経験の話をします。そこでは癌の転移で数ヵ月後には死ぬことを予測された子供にも教育がなされていました。そこは養護学校が開設された初期の頃に教員同士が話し合いました。一ヶ月後に死んでいくかもしれない子供にいつたい英語を教えることは、どのような意味があるのか。かんかんがくがくの議論の末によつやく結論に達しました。その結論は死ぬ直前まで教育とは必要であるということでした。これは教室ではもちろんできません。病室のベッドの側での教育です。

不登校の学校に来れない子供の場合を考えてみます。不登校のために自宅に引きこもり日々を過ごしている子供たちにも教育はできるはずです。学校へ何とか連れだそうという立場ではなく、自宅でできる教育は何かということです。登校刺激を控えるということは、決して関わりをもたない、放つておくということではなく、その子供に負担のかからないありかたで、何らかの関わりをもつということはたえず必要なことだと思います。

そのことで思い出すのはマザーテレサの映画の一シーンです。「愛することとの反対は憎しみではない、無視することである」という台詞を強く思いだします。繰り返しますが、愛の反対は無視、すなわちその子供への関心を捨てることであると精神科の臨床でも痛感します。人を避けている子供であつても、違う意味で人を求めているという経験を数多くしています。そこで子供の心のストレスが高まっているときにどうやって関心を寄せればよいのか、その術が連携には大切です。このような「優しい愛の手」は子供一人一人によつて違うと思います。私がしばしば使うアイデアは手紙です。手紙は一方通行です、これが良いのです。見たくないときは子供は破つて捨ててしまえばいいわけです。形は何であれ大人側のホンネのメッセージを伝えていく、しかも粘り強く伝えていく、この姿勢が大

切です。子供が「教員にあいたくない」という言葉をそのまま額面どおりに受け止めていると、「もう先生にも忘れられてしまった」と思うようにもなります。やっぱり子供には寂しいことですね。マザー・テレサが死にいく人の手をとつて、死ぬことに寄り添つてあげたいというシーンがあります。辛い渦中にいるところに手をさしのべられるということは、やっぱり嬉しいことだと思います。安心が人一倍欲しいのが辛いときなのですから。そういう意味で日本の子供たちは学籍によつて守ることができますからと思ひます。どのような子供でも学校を窓口にして、誰か大人に出会う機会が与えられているわけです。もしもその大人のイメージが、子供にとって相談しやすい人であつたら、いつも子供の心の中で対話が起ころうです。「先生だったらこういうときにどうするのかな」そのようにイメージが心の中に宿れば心強さが違つてきます。

人が心に宿ることの大切さをもう少し話します。

一年位前にNHKで放映された「十日間の航海」という番組のことです。非行の若者たちを、ある牧師がヨットに乗せて大海原という大自然を一度でよいから体験してもらいたいと思つて、いろいろな困難を乗り越えて十日間だけですが、海に連れだした記録です。その中で一人の若者が涙ながらに語った言葉が強く心に残りました。

涙ながらに語つたことは二つありました。ひとつは「俺はこの年になるまで、誰ひとりとして大人から自分の顔をきちんと見てもらえなかつた」という言葉です。小さい頃から「おまえはいらないガキだ」「手の早いガキだ」「不良だ」「非行少年だ」「麻薬の売人だ」皆にラベルを貼られて、誰ひとりとして自分の顔をまともには見てくれなかつたといつてきめざめと泣くのです。そのような不幸な子供が日本にも確実にいると思うのです。大人は子供を見ているようで、その一部の子供たちにとつては誰も見てくれない、判つてくれない、そのようなスレ違いが気になります。

若者のもうひとつのおもてなし言葉も忘れられません。その若者は犯罪を繰り返したり、つかまつたりする度に「今度は悪いことはやめよう、真人間になろう」と何度も誓つたそうです。ただこの牧師に出会うことによって初めて初めてこう考えました「あなたに会つて判つたことは、今まで約束が守れなかつたのは一人であつたからかもしれない。あなたがいれば約束を守れるかもしれない」孤独で愛されない人にとって、心の支えになるような人が心に宿つたということは重要なことです。社会から一人ぼつちになつたような状況で、心の中に支えになる大人のイメージが作れるような大人に出会えれば深い深刻な状況でも生き方は少しは変わるものではないかという気がします。

私の話の最後に、子供への援助、どのように手助けを考えたらよいのかという話をします。

不登校の子供にあつたときにつつも私は思うのですが「この子供は安心して毎日暮らしているのかな」ということです。おそらく難しい。多くの子供たちはイバラの日々の連続を生きているわけです。そこで私たち大人がこの子どもたちに何が援助できるのかということです。今私は「安心できる時間のプレゼント」がこの子供たちに届けられたらと痛切に思っています。

学校に通える子供がほとんどのときに、自分が学校に通えないことは辛いわけです。「明日は学校に行こう、明日こそ学校に行かなくては」そう思つても翌朝はやつぱり登校ができないのが多くの不登校の子供たちです。このような子供たちにとつては二十四時間のうちに八時間ぐつすり眠れば幸せだと思います。中には眠れなかつたり、悪夢にうなされたりの子供もいます。どうにか眠れた子供にしても、残りの起きている十六時間の中で、その子供が不安から解放された「生き生きした目」をした時間がいつたいどのくらいあるのかと考えてしまいます。五分でも良い、そのような時間が明日につながつてわざかでもいいから積み重なつていけばもつと良い。このような意味で「安心できる時間のプレゼント」も教育の援助にとつては大切なことの一つだと思います。

次に申し上げたいことは「子供の心の窓」を大切にしていただきたいということです。前にも言いましたが子供は何かに関わりをもちたく思っているわけです。子供は子供なりに「心の窓」をあけてコミュニケーションを考えたり、うつ積したものを紛らわしたりもしているわけです。不登校の子供にとつて確かに不登校は重要な気がかりではあります。それだけではないのです。不幸な場合は子供の心の窓が微妙に大人のそれとすれ違つてしまつて、子供は何もしやべつてくれない、判らないといった感想を大人はもつてしまふことにもなるのです。しかしそのようなときは、子供自身も同様に大人のことが判らない気持ちになつてもいます。

学校に行かないで昼間からファミコンばかりやつてゐる子供がいたとします。私が悲しく思うのは「この子はファミコンしかやらない」という大人の言葉です。そのような子がやがてファミコンすらできなくなると、その時間の過ごしかたのそれなりの意味に気がつくのです。ファミコンしかやらないと思っていた子どもがファミコンすらできなくなつて、ずっと寝たり、暴力をふるいはじめたりのような生活になると、そのような時間の過ごしかたの質の良さにも気づくのです。失つて初めて気づくことはよくあることです。

学校も似たような面があります。子供が通学しているときはたいした苦痛もないと思うのが大人です。休み始めて初めて「あの子はいろいろなことがあつたけれども一生懸命頑張つて通つていたんだな」と、失つて初めて気づくのです。

残念なことに、子供自身が内心では「俺はファミコンしかやつてない、我がままだ」と思つていることが多いのです。つまりこの机の上のコップに水が半分入つていて、半分も水が入つていて、というふうには子供は思わないのですね。辛い状況の子供はこのコップの上のほう、足りないところばかりに目がいきがちです。それでは私たち大人は子供に何がプレゼントできるかというと、この水

が半分入っている、言い換えるとファミコンはできるんだ、ということを評価してあげることです。そして数多くのファミコンのカセットの中で、どうしてこのカセットに关心を寄せるのかとか、今までとは視点を少し変えて子供のファミコンという「心の窓」を通じておしゃべりを進める中で、子供自身が自分に気がつく機会に変えたいものです。

次に不登校は「心のひび」の結果であるという話をします。学校に行かれなくなつたということは氷山の一角であつて、実は海面下で目にふれない背景が問題になることが多いのです。不登校は子供が単純にだらしなく怠けているのではなく、何らかの「心のひび」が入つているのです。私はそのひびを全て精神病だ、というような乱暴な言い方をここでしているつもりはありません。しかし強調しておきたいことは多くの不登校は仮病ではないということです。ところが意欲がない、怠けているみたいといった「怠学」という言葉をときどき耳にします。「怠学」という言葉はきわめて厳密に狭い意味で使つていかないと危険なことが起こるような気がします。怠学というと子供が悪いようにとれますが、多くの不登校の子供たちは子供自身も辛い状況下にあるのです。不登校は交通事故でくわしたようなものでもあります。子供も何だか判らないけれども、足の骨を折つたかのように、あることが契機になって心にもひびが入つて登校できなくなつてしまつたというようなものです。骨のひびが治るのに時間がかかるように心のひびにも時間がかかるのです。

その「心のひび」の援助の覚書を少し話します。

心のひびが入つた状況では「成せば成る」という言葉は絶対にないと言ふことです。むしろ「成せば成らない」とでも言いたいくらいです。自分の根性、気構えなどではどうにかは成らないことが多いのです。むしろ治そうとすればするほど、「心のひび」をひどくする結果になつてしまふのです。そのためにも治そうとあまり力はないで、その代わりに大人は、目の前の子供の存在全体を認めてほし

い、判つてあげて欲しいということです。不登校をしている子供を治すのではなく、生きているその子供を受け入れて欲しいのです。

次に「心のひび」を治すことの援助として「開かれる」ことを強調したいと思います。即ち悩みが生じたときは心の奥に閉じ込めておかないで、開かれていくことが大事です。どうしても心の問題が生じると、自分の中で、家族の中で閉じてしまいがちです。何でもよいのですが、外に関心が向けばよいと思います。人間だけではなく、ほつとできるもの、例えば自然と出会うことでもよいのです。心をいたずらに点検したりするよりは、外に開かれて行くことです。もやもやした気持ちを言葉に代えることも「開かれる」ことですし、夫婦で話し合うこともそうです。閉じ始めると過去の些細なことが妙に気になつたりもしてしまうわけです。そういう意味でイソップの「北風と太陽」という寓話を思い浮かべます。不登校を何とかしよう、何とか治そうとすれば余計に難しくなつてしまつ、そうではなく家庭の雰囲気、学校の雰囲気、あるいは地域の雰囲気、多くのところでポカポカと居心地をよくすることが疲れた心には大事なことになつてくるわけです。

最後に時間もまいましたので付け加えて申し上げたいことは、今まで大人の悪口をいつているようにも聞こえたかもしれません、大人たちは自信をもつて子供たちにのぞんでいただきたいと思うのです。私たち大人は子供たちを傷つけようとして意地悪をしてきたわけではないのです。謝るべき点はそれとして、何も子供たちに「腫れ物」に触るかのようなおよび腰ではますます子供が氣の毒です。私たち大人に今必要なことは、教育も、親も、家族も、自信をもつて生きるということです。それなりに精一杯やつてはいるんだと、自分自身をねぎらい支えることが大切です。何もこれは子供に対して開き直つて威張るというのではなく、自分たちが生き生きと生きて暮らしていく、そのことが子供たちに最良のプレゼントだと思うからです。

以上です。（拍手）

○林 精神医学の立場から子供の問題を考えるときに、不登校という現象そのものを問題にするのではなくて、やはり子供の心の健康というのを考えることを一番大切にしなきゃいけないのではないか。特に子供の見えない心を大切にすると、いうことが重要だというご指摘がございました。

そのほか、教師一人で見るのではなくて、連携して見る必要があるとか、あるいは子供への援助の具体的な事柄について、さまざまに示唆に富むお話があつたと思います。

その話は、次の菅先生ともつながっていくところだと思いますので、続きまして、菅先生、よろしくお願ひいたします。

○菅 菅でございます。

現場の永田先生、それから今、お医者さんの竹内先生からお話をあつたので、私は少し角度を変えまして、児童文学作家としての不登校という話を皮切りにしてみたいと思います。



私が不登校に興味を持ったのは、自分自身がかなりひどい不登校児だったからです。理由は病弱だったんです。小さいときから、小学校の四、五年ぐらいまでですけれども、小児がかかる法定伝染病、例えば、皆さんご存じないかもしれないけれども、猩紅熱とか、ジフテリアとか、今では聞いたこともないような名前の病気を軒並みやるんです。毎年、毎年、恐らく三分の一ぐらいは欠席する。病気が治つて学校に行くと、もう授業がどつと進んでいて、それで何にもわからない。うちに帰つて、「もうあしたから学校に行きたくない」と泣くんですね。おふくろが女学校の先生で、猛烈に強い女性でしたから、ものすごくしかるわけです。それで次の日に無理

やりに学校に連れて行かれる。

本当は落第してもおかしくなかつたんだろうけれども、女学校の先生だったし、教育熱心だったから、学校の方は進級だけはさせてくれたんでしょうな。それで何とか五年生ぐらいまでいつたわけです。

それからもう一つは、実は私が中学一年のときに、日本が戦争に負けるんですけれども、そういう戦争中に病弱な男の子だった。自分たちの未来は兵隊であると、大変な大前提がありまして、そういう兵隊にとてもなれそうもない人間だということが子供心に非常によくわかつていまして、戦争に向かっていく学校の中の教育というのにとつてもアレルギーがあつたんです。

ですから、とてもつらい小学校時代を過ごしてきた。ただ、小学校の最後ぐらいになつて少し立ち直るんです。多分こういうことは不登校児の中にいろいろあると思うんですけれども、全くの偶然の機会からです。

それはクラスの中で比較的強い子、いじめっ子なんですけれども、そのいじめっ子がたまたま私をなぶりものにした。私は、けんかなど一度もしたことがない子でしたから、どういうふうに対応したのかよく覚えてないんだけれども、少しばかり背の高い子だったのですから、防衛するために相手をつかまえまして、グルグル自分の周りを五回か、十回か回したんです。そしたら、だんだん遠心力が働いて、加速度が加わってくるんですね。猛烈な勢いで相手が僕の周りを回っているんです。そのまま回し続けるのが恐くなつて手を放したら、相手は教室のうしろまで飛んでいて大ケガをした。つまりいじめっ子を偶然やつつけたわけです。そのことがあつてから、クラスの中の人間関係が一八〇度変わるんですね。それまで、僕はいつもいじめられてメソメソして、長い間休んでいて、たまに学校に行くと、授業は進んで「あしたから行きたくない」という子が、何だか知らない友だちがで

きちやつて、周りの友だちと仲よくなつて、ついでに言うと、お決まりのコースですけれども、悪事を働くようになる。集団万引きとか、カツアゲ、今までの世界とは一八〇度違つた世界に小学校の五年の終わりから六年にかけてなるんです。

それは今考へても夢のようで、どうしてあんなばかなことになつたんだろうかと思うけれども、あの年齢にもう一度ああいう環境になつたら、やっぱりあの悪事はしたいな。とつても楽しかつた。そういう思い出にあふれているわけです。

やがて戦争は終わります。戦争が終わる直前ですけれども、場所を変わるんです。それは疎開のようにして、それまで住んでいた中都市の長屋、母親が女学校の先生でしたけれども、その女学校の先生でお手伝いさんを雇つて、私を育ててくれていた長屋住まいから、今度は山陰の半農半漁の貧しい農村に変わるんです。それはおやじが禅宗のお坊さんとして、禅宗のお坊さんのお寺に疎開同然に変わつていくわけです。変わつていつたところで終戦になるわけです。

そこで世の中の方が今度は一八〇度変わる。つまり、今までとても自分には向いていない、兵隊にならなければいけないという世界が全部崩壊するんです。兵隊にならなくてもいいということになつたときの解放感というの、とてもこれはまた子供心に大変なもんだつた。

もう一つ、大きな変動が私におとずれるんです。それは中学に入ったころ、今まで小学校のときはいつも授業についていけなくて、劣等生でわからない、わからないと思つていたのに、中学に入つてみたら、どうやら僕は数学や理科がほかの人よりもできる生徒らしいということがわかつてくるんですね。そこに昭和で言うと、二十四年か二十三年か、私が中学の三年ぐらいだと思うんですけれども、湯川博士という人が日本人で初めてノーベル賞をもらつんです。そしたらそのときのノーベル賞の解説記事にこう書いてあつた。「湯川先生の専門は、理論物理学だ。理論物理学というのは紙と鉛筆と頭

さえあればできる。つまり、貧乏な敗戦国日本にぴったりの学問である」と書いてあるんです。

「ほう、それではこれは僕にぴったりだな」と思つてね。貧乏なお寺でしたからね。そうすると、人より少し数学や物理学ができそうだという予感がしたもんだから、「あつ、あれにかけねばいいんだ」。そういう目的意識を持つたときに、私は本当に生まれ変わった。

敗戦をはさんだ二～三年の間に三つぐらいの転機が訪れるんです。それで、それまでの私とはまるで変わった人間になる。

そういう不登校的な人間が変わっていくというプロセス。とつても私はこれは興味があつたんですね。後に大学を出まして、教師になつて、創作活動をやり始めるんですけれども、その最初の児童文学の作品で、ためらいもなく主人公は不登校児にしました。学校に行けない子供をまず主人公にする。これはある雑誌に三年半連載して、単行本で三冊分の大河小説の児童文学なんですけれども、第一巻は予定どおり私の子供時代のことを考えて、病弱で登校拒否児ということで始まつて、第一巻の真ん中ごろ、私のおやじがモデルである仙人和尚というのが出てくるんです。その仙人和尚が奥の院で不登校児の僕を育ててくれる。竹を伐つたり、椎茸を栽培したり、戦争体験を聞いたりするあたりがありまして、これが先ほど永田先生もおつしやつたんですけれども、ある書評家が二人が偶然「これはルソーの『エミール』の世界だ」と、こう言つてくれたんです。公教育としての学校を離れて仙人和尚が僕を育ててくれる。その教育方針、独特的の教育で自然児として育てていくわけです。

さて、一巻を終わつたころ、連載をどうしようか。かつての私のように学校に戻して、生き生きと学校生活を送らせようかと思つたんですけども、そのころようやく世間で不登校の問題が問題になつてきましたね。いろんな論調、ジャーナリズムの論調や、学校の論調を見ると、不登校の人間を学校に戻すのが善だという論調なんです。つまり、いろんな人が苦労して、学校に戻せばプラスにな

ると考えて、不登校をそのまま続いている子供はいかにも悪いような論調が多いので、「待てよ、これはおかしいな」と思った。ここで学校に戻したら、ますます世間の人は「やっぱり学校に戻るべきだ」と思うので、戻さないで、学校に行かせないまま大人にしようかななどと、作家というのはすぐそういう毒のある考えをしますから、世間の潮流に反するよつた書き方をしてやれと思って、とうとう学校に行かさないまま少年時代、青年時代を送らせて、普通の子供ならちょうど二十二歳、大学を卒業する年まで書くんです。その間に国内をいろいろ放浪していろんな人たちに出会い、それから国外にも出かけて行つて、ちょうどベトナム戦争のころでしたから、ベトナムに行つたり、アメリカに行つたりして、最後はアメリカに渡つて、当時のニクソン大統領に「ベトナム戦争をやめろ」などという直訴をしたり、児童文学だからこういうことができるんですね。荒唐無稽というか、何でも書けますからね。

それで二十二歳になつて、いわゆる普通の子が大学を卒業する年齢まで書いたわけです。育ての親であつた、僕のおやじがモデルの仙人和尚がそこで死ぬんです。そのみとりの枕元で僕がモデルの主人公がみとつてているわけです。そうすると、仙人和尚がその子を見て「おまえは立派な青年になつたな。日本じゅうのどの青年にも負けない立派な青年だ」、こう言うわけ。隣にいた親友のおじいさんには「この子がこんなに立派な青年になつたのは、もしかしたら学校に一度も行かなかつたからなつたんじゃないか」、こう言わせるんですね。

これは冗談のように皆さんお思いになるかもしれないけれども、そういうことを言われた方といふのは、私が尊敬している人の中に随分たくさんいるんです。例えば、名前を出しては申しわけないんだけれども、亡くなつた宮原誠一先生という方がいらっしゃつて、私はとてもこの先生にかわいがられて、一緒に公害の調査に行つたりなんかしたんです。そうすると、地方の住民運動やなんかを訪

ねていくと、本当にいい青年がいっぱいいるんですね。そのいい青年というのはどういうのかというと、せいぜい中卒、義務教育しか出でない。ときにうれしいのは、私は長い間定時制高校の教員だったんですけども、定時制高校を出でている生徒さんがいるわけです。それがその住民運動のリーダーなんです。

宮原先生は東大の先生でしたから、東大の大学院の学生なんかを連れて行って、私もそこに一緒に行つてはいるわけです。そうすると、東大の大学院の学生を相手にしてにやにや笑いながら、私に「昔さんね、地方のそういう定時制高校を出た青年は立派だね。見てごらん、この東大出た人間と比べたら、どっちが光つてる？輝いてる？」と、こういう皮肉を言つていられた。

それは本当にそうなんです。実際に比べてみればそういうことはわかるんです。だから、偉い学者の先生でもそういうことを言つていらつしやつたんで、私はとうとうこの物語を最後まで不登校のまま学校に行かせないで、しかも、「学校に行かなかつたからこんな立派な青年になつたんだ」という結びの言葉で終わらせたわけです。

ただ、そればかりではよくないんで、次に書いた作品は、今度は不登校から回復する作品なんですけれども、これは私がかつてそうであつたように、不登校だつた。今度は女の子なんですけれども、女の子が主人公として、その女の子があることで、また偶然なんですけれども、ある秘密というか、一家がみんな隠していたようなことの秘密をかぎ当てるんです。

小学校の高学年の子どもというのは、知的好奇心だとか、正義感だとか、そういうものが突然のよううに、大人が考えられないような力を持つて育つ時期で、その時期に大人との関係がうまくいけば、ぱつと上にいくし、うまくいかないと大人社会になじまないで、逆に不登校の方に向かう。そういう何か非常に大事な、小学校の五年生、六年生というのはとても心理的な大事な時期だということを、自分

のことを考へてもそうだし、自分の子供のことを考へてもそうだし、生徒たちのことを考へてもそ  
なんですけれども、そういう大事な切れ目の時期に不登校だった子供が劇的に今度は再生する物語を  
書くんです。

両方の目というのが私らにとつては必要じゃないか。大体作家は不登校であるとか、いじめである  
とか、こういうのを主題に書きたがるもんなんです。どうして書きたがるかというと、いじめられて  
いたり、不登校であつたりした子供と、それがいろんなプロセスを経て、今度はそこから解放された  
状態の子供の落差、それが飛躍的に大きいわけです。その部分をどういうふうにリアリティーを持つ  
て書くかというところに、作家としての一つの腕の見せどころがあるのですから、だれでも一度は  
それに挑戦してみたいというふうに思つんじやないかと思います。

さて、時間がだんだんなくなつてきましたので、私も定時制高校の教員だったのですから、作品  
の世界だけで不登校を扱うのではなくて、実際の教師生活の中で不登校を扱わざるを得ないというか、  
そういう不登校児が周りにあらわれてくるという状況が、ちょうど高度成長が終わつた時期、低成長  
に入つた時期に入つてきます。

このときの話はまた後で質問でも出れば詳しく申し上げますけれども、一番最初に会つた不登校児  
というのが、とつても私にとつては印象的でした。そのときにわかつたことを二つだけ申し上げます  
と、不登校的な子供というのは、ある空間に対する特殊なセンスというか、感受性を持つている。

これは後で永田先生からも、十年前に私はお聞きしたことなんですけれども、例えば学校という建  
物、空間を見たときに、お昼の光がサンサンと照つている校舎を、パッと見る。そうすると、白く輝い  
た校舎の建物があつて、それは病院とか、刑務所といったようなイメージで迫つてくる。ですから、  
そういう違和感のある、そういう空間に対する一つの感受性を和らげるような、そういう方法を大人

は考えると、もしかすると不登校児がうまく学校になじむようなチャンスがあるかもしれないというような、ヒントを与えたことがあるんです。それと同じことを最初に出会った不登校児について考えました。これは説明すると長くなりますが省略します。

もう一つは、その不登校的な子供と一生懸命かかわっている、一生懸命という言葉は余りいい言葉ではないんで、余り一生懸命じやない方が本当はいいんですけども、チャランポラン、大体僕は人間がチャランポランしていますから、チャランポランにつき合っているんですけども、そうすると、必ず思わぬサインが向こうから出てくる。それはもう劇的なサインである場合がある。

また、これも説明するのに時間がかかりますから、余り詳しくは言いませんけれども、思わぬサインが出てきて、「あっ、そうだったのか。おまえはそういうことを考えていたのか。僕にそういうことをしてほしいと思っていたのか」ということが、あるときパーツと広がるようにサインが届くことがありますて、一回そういうサインが読めると、次々読めてくる。相手も喜んで次々出してくる。それで共有する世界がパーツと広がっていくという体験をするんですけども、そういうことがあった。

今から八年前ですけれども、その当時湘南高校というところの定時制の教員を私はやっていたんです。

ちょうど一年生を持とうということになりました、一年生の担任団の中心になる。定時制というのには四年間ですけれども、そのときにこれはもしかすると、私は持ち上がり、担任の最後になるかもしれないという予感もしたものですから、かなり不登校の問題について丁寧に実践をして、後、皆さんに伝えられる程度のことをやろうという気持ちがあつた。定時制というのは入試のときに面接がありますし、湘南高校というのは実は一二〇人とるところに、その年なんかもそうでしたけれども、二〇〇人近い応募者があるんです。八〇人落とさなきゃいけないんです。

普通の定時制だと定数ぎりぎりぐらいだから、ほとんど全員入学になるんですけども、当時の湘南というのは、そういうふうに非常にたくさん応募者があつた。いろいろ調べてみると、不登校の子供というのは明らかに不利益な扱いをされている。

例えばボーダーラインに不登校児がいる。それから一方普通の子供がいる。普通の子供は中学校三年間一日も休まないで皆勤で来ている。同じ点数しかとれてない、その不登校児は中学校十日間しか行っていない。どっちをとるかといつたら、人情としてやつぱり一日も休んでない方をとりたいでしよう。だつて、定時制に来たつて、また不登校になるかもしれないんだからね。

私はいろいろ考えていたことがあつたのですから、いろんなデータをとつたりして、思い切つて、私のクラスに不登校の子供を何人か入れて、どういうふうなことが私はできるかということを試そうとした。一番不登校児の多い班の面接を引き受けまして、私のクラスに数名の不登校児が入ってきたわけです。

いろいろ努力はしたが、もちろんうまくいかなくて、定時制に入つてからも不登校になつてやめていた子もいます。成功した子もいます。成功した生徒の中の一人ですけれども、越前君が、きょう、この場所に来ています。私の話が終わつた後、直接本人から、定時制高校でどういうふうにうまく学校になじめたのか、そのあたりのことを聞いていただければ、一番説得力があると思います。

越前君については、私が余り説明しない方がいいと思いますので、あとは彼につなぎたいと思います。(拍手)

○林 どうもありがとうございました。

それでは、越前さん、早速ですが、よろしくお願ひいたします。



○越前 初めまして、越前と申します。

越前という字は越前岬の「越前」ですから、多分覚えやすいと思います。初めに、私自身が体験した登校拒否の経過をお話しさせていただいた後に、自分にとつて、この登校拒否という体験が、何だったかというか、自分なりに今考えていることを少しお話しできたらなと思っています。

私は、登校拒否を始めたのが小学校六年生の一学期のことです。どういうきっかけで登校拒否をしたかというと、授業中に座つていると、変な気持ちに何かなつてくるんです。今も緊張して、手に脂汗をかいていますけれども、そのときもドキドキしてきて、手に脂汗をかいてきて、今にも何か本当に自分がどうにかなつちやうんじやないかなというような、すごい恐怖心というか、本当にジッとしていられないような不安な気持ちに、小学校の六年生の一学期にそういう体験をしました。

昼過ぎになると、結構そういう気持ちもおさまってきて、「あつ、何でもないのかな」というふうに思つていたんですけども、何日かこういう気持ちが学校で続くようになりますて、学校に行くと、またそういう気持ちになつてしまつ。変な気持ちになつちやう。何か怖いなというような気持ちから、もう学校へは行きたくないという気持ちになつてしまつ。ということがきっかけになりました。小学校六年生の一学期から学校を休み始めるようになりました。

うちの母親もそんなことが起つてしまつたのですから、驚いて、近所のお医者さんに相談に行つたんですけども、ここで大学病院の方を紹介されまして、大学病院の方でカウンセリングを受けようになりました。

小学校の方は、簡単にお話ししますと、その後、行つたり行かなかつたりというようなことが続き

まして、何とか卒業をするんです。病院の方も行つたり行かなかつたり、学校へちょくちょく行つていたので、病院の方も何かあんまし熱心に通わなくなつてしまつて、中学校に入ると同時に病院の方も行かなくなりました。

中学校一年に入学して、気分も一新して通い始めるんですけれども、二学期ぐらいになるとまた休み始めてしまつ。今度は別にそういう変な気持ちでドキドキするというのではなくて、何となく学校なんかに行きたくないなというか、何か学校へ行くのがいやだなというようなことになつてしまつて、そう思うと、私は結構頑固なんで、学校へ行かなくなつてしまつて、中学一年の二学期ごろから学校を休み始めて、また行つたり行かなかつたりという日々が続きます。

中学一年生も何とか進級しまして、中学二年になるわけですけれども、ここから私自身も家族も結構つらい一年間が始まるんです。

中学二年に入りますと、もう一日も学校へ行きませんでした。年間の出席日数も多分十日に満たなかつたかなというふうに記憶しているんですけども、ずっと家に閉じこもりつ放して、家から出ると、近所の人の目というのがありましたから、なかなか出にくいうつもあつて、家で過ごす期間が中学校二年の一学期間は長く続きました。

ここで、このままではいけないというふうに私自身も考えていまして、学校を変わろう、転校しようということを考えました。大阪に親戚があるんですけども、大阪の方の中学校へ思い切つて転校することにしました。そのことを地域の自分の籍のある中学校の先生に相談したんですけども、反対されまして、「やっぱり学校は変わつてもだめだから」というふうなことを言されました。「それで変わらなければ」ということを頑固に押し通しまして、大阪の方に転校することになりました。大阪の方の学校へ一週間ぐらい行つたと思うんですけども、一週間でやはりだめで、朝起きて、

やつぱりだめだなというか、トイレの中に閉じこもつてしまいまして、親戚のおばさんもびっくりさせちゃいまして、結局、大阪の方も一週間ほどで帰つてきてしました。

その後、自分の地元には学校の籍がなくて、大阪から籍をどういうふうに移そうかというような話をしていたんですけども、たまたま父親が神奈川県の公務員をしていまして、そのつながりで神奈川県の医療センターの方へ通院というか、またカウンセリングを受けたらどうかということを父親の方から言つてきましたし、神奈川県の医療センターの方へ中学二年の二学期、大阪から帰つてきたころだと思うんですけども、通院するようになりました。

通院しながら、そこではいろいろカウンセリングを受けたりとか、絵をかく時間とか、ソフトボールをする時間というのが病棟の中でありまして、それに参加させてもらうような形で通院しました。

そこは、全部かどうかわからないんですけども、私の場合は、入院して治療をしようということを言つていまして、ベッドを待つてはいる状態でした。それで中学二年の三学期になりました。ベッドがあきまして、入院することになりました。病院ですから、入院すると、いろいろと薬を飲むということも当然あると思うんですが、私自身、確かに学校は行つていなければ、薬を飲むのとはちよつと違うかなというか、病気ではないなということも自分なりに感じてまして、そもそも自分が病院に入院するというのは、病気でもないのにおかしいなというようにちよつと思いまして、そこの医療センターの入院先も一週間ほどで脱走してしまいました。

看護婦さんに「ちよつとマラソンに行つてきます」と言いながら、バス停まで思いつきり走つていつて逃げて帰つてしまつたんです。その後、母親が荷物をとりにいきました。

そんなことが二年生、一年間、大阪に行つたり、病院に入院したりというような試行錯誤がずっと続きました。その後どうしようかというか、もう本当に家族とも途方に暮れまして、中学三年からは

実は市内の養護学校の一角に通学させてもらうことになりました。

父親と、その養護学校の校長先生にお願いしに行きました。せひ三年生からめんどうを見てほしいというか、ぜひ養護学校の方へ通わせてほしいということをお願いしに行きました。六年生のときに登校拒否を始めたときに、教育委員会の先生に「養護学校に行つたらどうか」というような相談があつたことを記憶していまして、それで養護学校にお願いしに行つたという経過があるんです。この中学校三年生の養護学校での生活、一年間が自分にとつてすごい転換期というか、いい方向へ向かう生活だったなというふうに自分なりに考えて います。

その辺の養護学校の生活のことをちょっと詳しくお話ししたらと思つたんですけども、簡単に出来事を幾つかちょっとお話しできたらなと思います。

その生活は、私は障害を持つていないんで、養護学校の一角へ通学して、その障害児とは別の行動で生活をします。一日、行つて、先生に記録用紙というのをつくつていただきまして、自分でその日何をするか予定を立てます。何時から何時まではこの勉強をして、何時から何時までは洗たくして、鳥小屋の掃除をしてとか、細かく結構予定を立てるんです。それで帰るときに、それができたかどうか自分で評価して、できなかつたのはどうしてかというのを反省するというか、そういうふうに自分的一日の生活を自分で計画を立てます。

そんな生活をしていまして、夏のことだと思うんですけども、養護学校ですから、畑があるんです。十メートル四方ぐらいの広さなんですけれども、夏に雑草がたくさん生えていまして、そこの草刈りをするようにと言われまして、夏の暑い中、半日かけて全部草を刈りました。私にとっては本当に、そんな広さの草刈りをするというのは生まれて初めての経験で、暑い中、どうしてこんなことをしなきやいけないのかなと文句を思いながらも、何かそういう経験もあります。

あと養護学校ですと、市内に一つということで、かなり家から遠いんですね。それで自転車で通わせてもらうことにさせてもらいました、実はその自転車で通学中に自転車が石にぶつかってしまって故障してしまいました。それを学校へ押していきました、それを一日かけて修理しました。それを先生は何とも言わなくて、「直るまでやつていいよ」というふうに言つていただきました。結局、直らなかつたんですけども、乗れるようにしました。

こういう経験は本当に今までの自分にない経験で、すごく今でも覚えています。

それから養護学校ですから、障害児の友だちと一緒に修学旅行へ参加させていただくという機会がありまして、実はその生活が、今度私が就職する就職先が福祉施設なんですけれども、その将来の仕事とつながつたんです。そういうた障害児と一緒に修学旅行に行つたということもありました。

それで、養護学校の生活というのを、今幾つか出来事をお話ししたんですけれども、この三年生の一年間、養護学校での生活というのは、非常に自分自身を振り返るというか、見つめ直すというか、すごくそういう時期だったんではないかなと考えています。自分で記録して、自分のやつたことを振り返つて反省して、その記録の一つの中に、「家族との対話」という欄がありまして、改めて家族とうちでどんな話をしたのかということを書きなさいという指導を受けたんですけれども、意識してやってみると、家で、こんな話をしたのか、自分はやっぱり父親と余り話そうとしていないのかなど、いろんなそういうことにも気づけまして、すごく自分自身というのを見つめ直せる場だったのかなと思っています。

中学三年生ですから、今度進学という問題が出てくるんですけれども、そういう自分を振り返るような生活をしていく中で、自分は本当にどうして学校に行くのか、どうして勉強するのかなということを考えてみたいなという希望がありまして、かなり自分の体を動かしてみたい。具体的に言つたら、

働いてみたいな、仕事をしてみたいなという気持ちになりました。仕事をしながら、勉強することが、仕事にどんなふうにして役に立つかなどいうのを考えてみたいと思いました、定時制高校の方へ進学を希望しました。

定時制高校に入学をするんですけども、中学時代と定時制高校へ行くときの登校する気持ちというのが全然違うんです。どんなふうに違うかというと、中学校まではもちろん義務教育ということもあつたかもしれないんですけども、学校は行かなくちゃいけないんだ。必ず行かなきゃいけない。そういう気持ちがあつたんです。定時制高校へ行くときは、さつきも言いましたように、どうして学校に行つて勉強するのかということを考えてみたいという希望がありましたから、何のために学校に行くのかということを考えながら定時制高校へ行きました。そういうふうに登校する気持ちの違いというのが自分自身にありました。

それから幾つか、二年ほど前にこういった機会がありまして、自分の体験をお話したんですけども、そのときに定時制高校の生活がすごく新鮮で、自分にとつて何か新しい体験が多かつたという話をしたんです。今なんかそれを振り返つてみて、何が新鮮だったのかなというのを考えるんですけども、それは一つには学校に行く意味ということを考えたということもあるんですけども、一つは、自分の存在感というか、それを実感できただんではないのかなというふうに思っています。

例えば昼間は仕事をしていたんですけども、職場へ行つて、自分もその職場の人たちから信頼されているし、また、自分もその職場の人たちを信頼していくというか、人と人との信頼感というのをすごく実感できました。学校へ行けば、友だちも自分を信頼してくれるし、私も友だちを信頼するし、私は今までそういう経験というか、親友というのがほとんどいませんでした。初めて定時制高校で親友というものを私は見つけたなという感じがしていまして、そういう人と人との信頼感というのが、

私はこの定時制高校で実感できたんではないのかなと思っています。

ちょっと長くなつてしまつたんですけど、最後に、じゃ、自分にとつてこの登校拒否という体験は何だったのかということを簡単に話せたらいなと思うんですけれども。私自身、登校拒否というのは、確かに学校へ行く、行かないということはすごく表面的なことで、自分にとつては本当に自分自身を見つめ直して、自分をまたつくっていくというか、新しい自分を築き上げていくような作業だったんじゃないのかなと思っています。それが養護学校であり、定時制高校という場だったんではないかなというふうに、自分なりに今考えています。

そういう作業を通して、学校へ行く意味、勉強していく意味を前向きに考えていくようになつたなというふうに思いますし、人と人とのそういう信頼関係を持つていくことのすばらしさというか、大切さというか、そういうことを実感できましたんではないかなと思います。

最後に、きょうはお母さん方が多いのかなというふうに思うんですけども、うちの母親もすごく、十年ほど前はいろいろと、親戚に行けば鋭い目があつたりとか、子供ながらに私も感じていましたけれども、どうか本当に登校拒否というものをマイナス面、確かに勉強がおくれたりとか、学校へ行かない時期は友だちとの関係も薄いということもあるかもしれません、それは必ず後で十分取り返すことができるものだと思います。ぜひそれをプラス面に考えて、必ず勉強していくことの意味とか、そういう人と信頼関係を持つていくことのすばらしさというのを必ず何か実感していく体験だと、そういう思ひます。

ありがとうございます。すみません。長くなつてしましました。（拍手）

○林 どうもありがとうございました。

菅先生、何かつけ加えることがござりますか。

○菅 越前君もちょっとかたくなっていたところもあって、さつき彼が言った、前にもこういう機会があつたというのは、実は藤沢市のある公民館で不登校の話をしてくれと言われまして、そのときに公民館の担当者から、元不登校であつたのに、現在は成功して生き生きと生きている生徒さんがいたら一緒に連れてきてくれというので、彼を連れて行つたわけです。一年前の話です。

彼は自分の大学のことは何も言わなかつたんですけども、湘南高校を無事に卒業しまして、卒業するときに大学にも行きたい。それで日本福祉大という名古屋の先の方にある、あそこを受験するわけです。もちろん二部です。昼間は、最初パン屋さんだつて、アルバイトをやって、パンをこねて、仕事をしながら大学に行きました。今年がちょうど四年目、卒業なんです。それで今長後の福祉関係のところに就職も決まつた。私にとつても自慢の生徒というか、誇りにすべき生徒なんです。

その公民館のときに、きょうはちょっと照れて言わなかつたけれども、——言つてもいいかな。——

こういうことを言つたんです。

「僕が登校拒否になつたときに、お母さんは取り乱して、僕のことをしかつたり、怒つたり、泣いたり、ときにはぶつたりした。僕は、お母さんにぶたれたりなんかすることもつらかつたけれども、それ以上に僕がとつてもつらかったのは、僕のためにお母さんがそういうふうに人間が変わつた。それまではとつても優しい自慢のお母さんだったのに、僕が登校拒否になつたために、そういうふうに取り乱して、僕をぶつたりするようになつたと思うと、そのことがとつてもつらくて、たまらなかつた。たくさんのお母さん（きょうよりもっと比率が高いんです。そういうお母さんがほとんどの会でしたからね。）皆さんに言いたいのは、子供が不登校になつたときに、必ず子供には不登校から自分の力で回復する力というのがあるんだから、それを信用して、泣いたり怒つたりしないでほしい。お母さんは、むしろ子育ての大部分は終わつたんだと思って、自分の趣味や、それからやりた

いことやなんか見つけて、そういうことを一生懸命やつていってくれば、僕も自分で自分のことは一生懸命考えて、どこの学校に行こうかと考えてやるんだから、そういうふうにお互いに生き方で競い合う。そういうふうにしてくれたら一番不登校児としては助かるんだ」という話を、ちょっと私が粉飾し過ぎかな。言つてくれて、それで参加していただけたお母さんたちはハンドバックをパチパチあけて、目頭を押さえていたと、そういう情景がとつても印象的だったことがありました。

○林 どうもありがとうございました。

私としては、特につけ加えることはございません。

今の越前さんの話の中に、三人の先生方が話されたこと、すべてが含まれているような気がいたします。

次のスケジュールですが、前半の話はとりあえずここまで終わらせていただきたいと思います。これから一〇分ほど休憩をいただきまして、それから後半の話に移らせていただきたいと思います。ご質問、ご意見等ございましたら、どうぞ遠慮なく紙に書きまして、お出しいただきたいと思います。

それでは、前半はこれで終わらせていただきたいと思います。

先生方、越前さん、どうもありがとうございました。(拍手)

——休憩——

○林 三人の先生方並びに越前さんの話をお聞きになりまして、どのようなことをお考えになつたか、指定討論の広瀬先生にお伺いしたいと思います。

では、広瀬先生、お願ひします。

## 指 定 討 論



○広瀬 シンポジストの方々並びに越前さんの話を大変興味深く聞かせていただきました。

ここでは時間が限られておりますので、一番最初の永田先生の話を中心に感じたことや疑問に思ったことをのべてみたいと思います。

不登校の子供に対する教師のかかわり方について、永田先生は、いくつかのポイントについて指摘されました。

一つは、教師の顔で子供に働きかけるという、そういうやり方というの子供にとつては余り意味がない。子供はいつまでも心を開いてくれないということです。教師根性というのでしょうか、教師というのは何でもかんでも子供に働きかけることがよいことであると思いがちです。善意にあふれた熱心な先生ほどいい先生だみたいなことが、この間言われてきました。しかし、そういう姿勢が不登校の子供たちの出現によつて崩されたというか、問い合わせられたということは非常に意味があるのではないかと思います。

次に集団に参加できないのはだめだとか、学校に来ないのは怠けているという決めつけが教師の間に根強くみられたということです。

また、教育は学校でしか行われない、学校こそが子供の発達を保障する場である、という学校信仰みたいなものもかなり根強く残っているということです。

こうしたなかで大切なことは、永田先生のおっしゃったように、教育とは何かを問い合わせてみることではないでしょうか。

学校の存在を問う、あるいは学校を相対化してみる、このような視点が是非とも必要だと思います。以上、永田先生の話を聞きして、私が共感した部分を述べたわけですが、次に一点ほど疑問点を述べさせていただきたいと思います。

まず一つは、不登校の子供へのかかわり方に関する問題です。今まで不登校児に対する対応の仕方がよくわかつていなかつたのが、最近方程式の解のようなものがチラホラみえてきた。つまりどういうことかと言いますと、やたらな登校刺激を加えないということですね。行きたくないのだったら、本人の気持ちを尊重する。ゆっくり休ませてあげるとか、寄り添つて暖かく見守つてあげるという処方せんが、行政サイドの方からも出てきている。

現在、文部省や教育委員会が、不登校の問題に対し対策会議を開き、さまざまな答申や報告書を出しています。なかには、不登校の子供にどのように対応したらよいかを記した、いわゆるハンドブックのようなものもあります。不登校児をいろいろなタイプに分け、こういうタイプにはこのように対応せよと、言葉は悪いのですが、かなりマニュアル化された内容になっています。

実は私は今、神奈川県の教育文化研究所で教育相談といふ仕事をやっています。最近、非常に不登校の相談が多いのですが、そこで気づくことの一つは、母親の方がかなり勉強しているということです。「不登校の子供を抱えていて困っている。どうしたらいいのか」と言いつつ、「やはり登校刺激を与えないで、そのままにしておくのがいいんでしょうね」と、こちらが答える前に、対応の仕方を自分から話すわけです。

つまり、子供の対処の仕方みたいなものがかなり一般化してきているといえます。しかし、そこで

いつも感じることは、そのようにマニュアルどおりに登校刺激を与えないことがいいことなのかどうかということです。電話相談を受けながら常に感じているわけです。

例えば中学生、高校生になりますと、親がいくら言つても、教師がいくら言つても行かない子は行かないんで、これはもうある意味では説得というのは無理なわけですが、小学校低学年の場合には、学校に慣れていないという面があつて、逆に言うと、学校に慣れれば、ある程度スーッとそのまま行つてしまふ可能性もあるのではないかという気がするわけですね。ですから、「行きたくない。いやだよ」と言つたとき、登校刺激を与えない方がいいのだということをソツとしておくのか、それとも何か手を打つて、いろいろだましまだましても学校に行くようになさせた方がよいのか。そのところでいつも悩んだりするわけです。

そこで、永田先生にお聞きしたいのは、登校刺激を与えないというように、一律に果して言えるのかどうか。不登校の子供に対して、親なり、教師なりが具体的な場面において、どのような対応をしたらよいのか、その具体的な対応の仕方についてまずお聞きしたいということです。

二つ目は、学校をどう変えていくかという問題です。今学校に依存しない生き方が生まれてきている。これは、ある意味では注目すべき動きだと思います。

ただ、ここで注意しなければいけないのは、それでは学校はどうなるのかということです。学校に行かない方が、極端な話、いいのだというような議論になつてしまふ場合もあるわけです。

いじめや管理教育にみられるように、学校はさまざまな問題を抱えています。しかし、私は、全面的に学校を見捨てる気にもなれないんですね。今まででは学校へ行っている子供がいい子で、学校に行かない子はふまじめで、怠け者だという見方があつた。ところが、不登校の子供が出てくると、今度は逆に、学校に行かない子供の方が、感受性も豊かだし、いろんな生き方が学べるからいいのだとい

う議論も出てくるようになつた。

もちろんこの主張には、学校に行つてゐる子はだめなんだというニュアンスは多分ないと思いますが、ただここで気をつけなければならることは、こうした「意味づけ」は必要なのだろうかということです。子供をあれこれ意味づけることにはあくまでも慎重でありたいという気がします。むしろよけいな「意味づけ」をせずに、学校に行く子もいて当たり前だし、学校に行かない子もいて当たり前、そうしたとらえ方でいいのではないかと思います。

そこで質問なのですが、学校以外の場での生き方に注目したいということですが、他方では学校をどのように変えていくかという問題が残つてゐると思います。今、不登校の子供に対する対応は、子供を学校に適応させることを基本にしているように思われます。しかし、逆に学校を子供に適応させるという改革も必要ではないでしょうか。この点についての永田先生のお考えを聞かせていただければ、と思います。

以上、二点についてよろしくお願ひいたします。

○林 では、永田先生、よろしくお願ひいたします。

○永田 今出された問題の直接のお答えになるかどうかわかりませんが、私は、現実に横浜の中で相談指導学級という、学校に行けなかつた子供たちが集まつてくる学級をやつております。きょう、さつき会場からの質問の中にも、私あての質問として、そういう学級をつくり、あるいは不適応指導教室というのもできてきている。だけど、そこにも行けない子供だつてやつぱりいるわけです。そういうことをどう考えるかということも含まれておりますけれども、私は、自分でそういう相談指導学級ということにかかわりながら、こついう存在というのは、矛盾した存在だというふうに、私自身が考えております。

矛盾した存在という一言でとりあえず片付けておきたいんですけども、だから、それを可否を問うと、ある人は必要悪だというふうに言いますし、そういうところがあつた方がいいという方もあれば、そういうことによつてかえつてマイナスが起るというご意見もあつて、私は、まさにそれを、その矛盾を、担当している者と、あるいはそれを監督していく行政が矛盾として、痛みとして、自分の責任として引き受けて考えていかなきやいけないというふうに思うわけです。

それはもう少し、今の登校刺激ということの関係で考えれば、やっぱりそれも学級であつて、学校の中につくるか、外につくるか、というような問題も含めて、これはいろんな今議論があるんですけども、どうやつたつてそこには矛盾が出てくるわけです。

その点で、ただし、学級という形をとることによつて、その中で私は学校と同じことをまずやつております。やっぱり学校に行けなくなつたことが、学校のその子の体験にとつてどういうつながりがあるかということについては、個々によつてみんな違います。だけど、その子にとつてはそういう学校体験の中でいいことがなかつたというか、プラスの体験にならなかつたということがあつたとしたら、それとは違う何か、例えば勉強の仕方でも、遊び方でも、人のつき合い方でも、あるいはそういう中に一人でいるとか、そういうことも含めて、今まで体験しなかつた体験がそこでできたらいい。そういう場として、公立学校とか、公共機関もそういう場所を設置するというか、用意する義務はあると思います。選択については、これは開かれて、自由であつたらいいというふうに思つております。

したがつて、今出来ましたように、民間でもいろんなことができてきて、これはきのうニュースで取り上げましたように、文部省が、民間のスペースも卒業認定等、あるいは出席のカウントに入れると。そうしたことを初等中等教育局長が述べてしまふと、下の方のお役人さんたちは大変だろうなと思ひ

ますが……。

ポンポン言つてしまつて、後、必ず現場では矛盾が起つてくるんですけれども、ただ、そういう、どんな子供にも登校拒否になる可能性が起るとか、文部省がそういう見解をこのごろ出してきたこと自体については、これは一つのディスカッションとして、大事な意味があるというふうには私は思つておりますけれども、現場ではそのことが必ずしもプラスに働いていないということは起ると思います。

これからますます矛盾は深まると思いますが、いわば私ははつきり言えば、そういう意味では手を汚していると思います。手を汚さないで、評論をしたり、コメントをすることはたやすいことだと思います。

十何年前、テレビ朝日が「世界の学校」という特集をしていた中で、これは世界のいろんな学校や、いろんな教育の場所の紹介をしたんですが、アメリカのある公立の小学校の校長先生の話が非常に印象に残っています。

その小学校には、普通の学級とオープンシステムの学級と二通りあるわけです。

その校長先生は、「私は、個人的にはオープンシステム、オープンスクールには反対である。しかし、それを求める親や子供たちがいる限り、私は、それをこの学校の中に設置していく」。

その中で、どっちを選ぶかとか、ある時期になつてどっちへ入つていくかということも、自由は保障されているわけです。乗りかえていくことは。だから、小学校の五年生まではオープンでやつたけれども、中学進学を考えて普通の学級に入つていくことも認める。デモクラシーというか、民主主義ということの根幹にかかる問題だと思います。

そういう制度の上のことでは、日本では、一つの制度をつくると、それが画一化して硬直化してい

く。私は、実は、二十五年ぐらい前にこの仕事を始めていて、そのころは全く孤立無縁で、何をどうしていいかわからなかつたわけですけれども、やがて日本にも登校拒否になつたら、今さつきマニュアル化とおつしやいましたけれども、そうしたらこういう子たちにはこういう課程をつくつて、こうやつていけばこうなるというシステムが完成するときがくるだらうということを、二十年ぐらい前に予感をしておりました。

不登校がふえたことによつて、今まさにそのことが起つてゐる。とすれば、今やることは、そのことをもう一回考え方にして、片一方では新しいものをつくりながら、片一方ではそれを否定していくと、いう大変矛盾したことを、私自身も毎日やつてゐるものですから、どうもこのごろよく眠れなくて、どうも朝起きぐあいが悪くて、胸が気持ちが悪くなつて、さつきの越前君のような体験を毎朝して、毎朝、学校に休むと電話しようかなんとか、もうすごく私は不登校になる直前で、実は三月で退職になるという、こういう形のチャンスにめぐまれております。いわば、そういうことで学校体験、それも特に今までしなかつた違つた学校体験とか、これは広い意味での民間の中の場面も含めて、子供の世界がとか、体験が広がること自体には、何かもつといろんな手だてが必要だらうと考えております。

○林 どうもありがとうございました。  
今、廣瀬先生の方からお話が出ました、登校刺激の問題について、竹内先生はどのようにお考えでしょか。よろしくお願ひいたします。

## 質疑の中で

○竹内 登校刺激を控える、ゆっくり休ませてあげる、これはマニュアルの形で普及されつつあります。むしろ普及しすぎのところもあるような気もします。ここでいうマニュアルは指針というようなものです。将棋や囲碁で例をあげれば定石ということであって、実践ではそれはひとつ手がかりにすぎないということです。実際に押しつけたり、心の裏打ちのない指示では大変危険に思います。人が一生懸命に考えていく過程で、その際の一つの判断の素材として用いるといつた、心のこもった指示が必要です。そうでないと登校刺激を控えるという錦の御旗になつて、子供との関わりの面倒くささの隠れ蓑になつてしまつ場合も起つてしまつます。つまり心のケア、関わりにおいてはお風呂のほど良い温度と同じだんじらしさを言われます。熱すぎても冷たすぎてもいけない。その中間のほどほどの適温がよいと。私たちプロはその調整をするためにいるのです。マニュアルや機械的にはこなせないわけです。

次に指示にどのようなメッセージを託していくかということの話しをします。ゆっくり休みなさいという指示は、当の本人である子供には意外に難しいものです。医者の指示でゆっくり休みなさいと言われても、病人はあれこれ考えてしまいます。将来の事、家族の事など。病気を素直に受け入れる、あるいはゆっくり心身共に休めるということはこのように簡単なようで難しいことです。その辛さを判断しないで指示を出したら、全く心がすれ違つてしまつます、そのような不安を含みにして教育的な方針を出していただきたいと思います。「ゆっくり自宅で休みなさい」という先生はお見舞いの手紙

や、家庭訪問などで、こちらが本当にゆつたりした安定した気分で出会えるように心がけることが重要です。つまりメッセージにはこちらの気分を託したいものです。

この機会に学校に望む事を言わせていただきます。

第一に学校に対し何が望まれているかということを具体的に考えていただきたい。子供のニード、親のニード、地域のニード等、生の声を学校はくみあげていただきたい。医者も教師もある意味ではサービス業というのが私の持論ですが、その意味でも私たちが子供たちに何を与えるかということではなく、学校へのニードにどのようにお答えしていくか、何が期待されているのかということです。これは不登校の家庭訪問の際にも肝心なところです。とりあえず何をサービスできるかといった姿勢です。

次に大人自身が学校という職場を楽しいところにしていかなくてはいけないという努力です。小児精神科の入院治療でも同じ事がいえるのですが、大人の背中を見て子供たちは、そのエネルギーをもらつて生き生きしたり、考えたりするわけです。学校全体で職員同士が思いやり、いたわりあうという姿勢をまず優先したいと思います。

予防の事にも簡単にふれさせていただきます。時間の関係で五点だけ話します。教師はとにかく子供を見てください。一人一人の子供の顔を見てください。四十人全員の子供の顔を見られるということは日常的には至難の技です。そのようなときは自分が今見られていない子供は誰かということを認識していただきたい。とにかく一人一人を見ていただきたい。普通の子供でした、というのは答としては少しきびしい気がします。「どのような子供でしたか」という質問に対し、一枚の紙に記述ができるようになつていただきたい。それには関心をもつての観察、ひたすらラベルを貼ることなく見ていただきたい。

第二に心の「ひび」の予防のために、その子供の甘えかた怒りかたに注目していただきたい。依存や攻撃をどのような場所で、どのような人にしているのかなど思いめぐらしていただきたい。甘えに關しては甘え上手なのか、下手くそな子供か、怒ることに關してはどうか。愚痴や問題を起こしている子供はある意味では周囲の関心がいくらかでも引き寄せられているので幸せです。そういうことを何もみせずに、大人のように一人で頑張っている子供はその不自然さが少し気にかかります。

第三に子供の表現を育むことです。言葉だけではなく絵でも音楽でも運動でもいいのです。感情が伝えられる術がもてればよいのです。表現できる子供は、いろいろな心のストレスも乗り越えることができるのです。先ほどの越前君のお話しをうかがつていて、このように言葉で表現することによって過去の苦しみを乗り越えて、立派にたくましく成長されているんだと思いました。言葉を探す、あるいは表現することによって、自分に新たに気づいていけるのです。表現できる子供は放つておいても大丈夫です。表現が苦手な子供に、表現できる術、あるいはその子供にあつた表現の型を一緒に探し育てていただきたいのです。

第四に子供にいろいろな経験と出会わせていただきたい。先生や大人自身にもいろいろな経験があつてほしいと思います。例えば普通学級の先生は養護学校をあまりごぞんじない、あるいは通信制や定時制の先生との交流は意外に少ないのでしょうか。教師の二ヶ所の集まりに私自身参加させていただいていますが、いろいろな教育や社会にあうことは私にとつても素晴らしい経験です。子供自身にも例えば障害の子供たちと出会うことをぜひさせたいものです。その障害に關して大人は「大事にしなさい」とか余計なことは言わないで経験させ、表現させていくことが大切です。いろいろな生き方を知ることは生きる意味で大きな励ましです。ある不登校の子供が「高校へ進学できなかつたら、この世の中は生きていけない」といった思いこみはそれまでの経験の乏しさにも原因がある

のです。

最後に予防のポイントとして、子供たちの良いところやほめられるところを大人たちがどの位数えられるかということです。そのためにも第一番目にあげた観察が重要にならなければなりませんが、目の前にいる子供の良いところを五つ位あげられるかどうか。自分のお子さんの場合はどうでしょうか。「悪いところ、注文したいこと」このほうが容易に心に浮かんでしまう大人も多いかもしれません。

しかしプロはここを乗り越えなくてはいけません。誰からも嫌われて相手にもされない子どもというのも現実にはいるのです。その子どもたちにもお世辞ではなく、こころから良い点を認められるかといった問題です。

そのことと同時に、子供が社会的に、あるいは人のために役にたつ喜びというのか、自分だけのことで喜ぶのではなく、その子供の存在が本当に生かされる、社会の中で認められる、そのような経験はさらに深い自信につながると思います。

以上のことと心の健康の予防というポイントとして申しあげました。

○林 どうもありがとうございます。

それでは、菅先生、菅先生あてへのご質問等を踏まえまして何かございましたら。

○菅 私にというのはなかつたのでいいです。お集まりの皆さんから、越前君に対する質問もあるんじゃないかと思うから。

○林 今、菅先生から、ご提案といいますか、進行上のお話がございましたけれども、実は、フロアの方からご質問いただいたもので特定の先生の名前がないのは、みんな私のところに参りまして、ここに大量にたまっているわけです。それで、その紹介もさせていただかなければいけないので、ちょっとだけそれをやらせていただきまして、それからフロアとのディスカッションに移らせていただき



たいと思います。

まず、具体的に不登校のお子さんを抱えているお母様お二人、つまり、小学校二年生の方と、高校二年生の方ですが、具体的な相談をしたいということだつたんですが、これはこの会ではなかなか難しいと思います。

私たちの神奈川県教育文化研究所では、相談室を開設しておりますので、そのパンフレットはありますでしょうか。——残念ながら、今置いてないですが、電話番号はわかっているはずですので、その電話番号は係の者が後でお教えたしますので、よろしかつたら受付のところに個別にお寄りいただければ、その電話番号はお知らせできると思います。お二方、そういう質問がありました。

それから、これはかなり重要な問題で、一部は広瀬先生の指定討論の中にも含まれていたことかと思いますけれども、これは親御さんの方からの質問なんですが、「きょうのこの話をお聞きになられた現場の先生、小学校、中学校の感想を、親の立場で伺いたい」。そういういわば挑戦的といいますか、それは

ちよつと言ひ過ぎかもしませんが、そういうご意見が出ておりました。

先生方も何人もいらしていると思いますので、フロアとのディスカッションの時間に、挑戦という言葉の適否はともかくとして、先生方なりのお考えを示していただければと思つております。

それからあとは、永田先生が行われているようなお仕事というのは、横浜以外でもあるのかというご質問がございましたが、この点についてはいかがでしようか。先生、ちよつとお願ひいたします。

○永田 今、県下では五～六カ所、各市に相談指導学級というものは設置されておりますが、システムや受け入れ方等についてはかなりいろいろあります。残念ながらよくあることは、そういうところに設置されてない地域の方からは、横浜に入れないのか、そういうことがありますけれども、これは各教育委員会でそれに対応しておりますので、そこにお問い合わせください。

## ディスカッション

○林 それではフロアからどうぞご自由にご発言いただきたいと思います。

ご意見、あるいはご質問等ありましたら、どうぞ、マイクが中ほどに用意されておりますので、お手をお挙げになつてご発言いただきたいと思います。そのときに、一応立場といいますか、親の立場、あるいは教師としての立場などを簡単にお話しいただければと思います。

手を挙げられた方、どうぞご発言ください。

○一 冒頭に教育部長さんからもちよつと触れられました、相模原の相談指導学級というところにおります中学校の教師です。

結論から言いますと、大変身につながる思いで、五人の方のお話を聞かせていただきました。

実は、私自身、現在の学級に来る前、当然、通常学級、普通の学級に十数年いたわけですが、今思うと、半分は自戒の念なんですが、結果的に大変子供に管理的にやってしまったというか、いや、もつと正直に言えば、個人的には非常にそういう厳しい押しつけのような指導方針には疑問を感じてはいたんですが、やはり振り返ると、自分もその中の一員になってしまっていたということが一つは感じます。

そして、その前の学校の中での終わりから二年目のときなんですが、持ち上がりではなくて、残った三年、二年間続けて三年を持った、その二年目の子たちに実は一年近くずっと反乱をされたんですね。主に女の子たちだったんです。それは今振り返っても、どこに問題があつたかとすると、もちろん自分の指導も問題があるんですが、その子たちが、もう二十歳過ぎていますが、今でも私にこう言つてくるんですね。言葉は違いますが、けけれども、「やっぱり受けた体罰と、納得のいかない指導ということはずっと



今でも傷に残っている」というふうに言われている。

私はそれを聞いて、改めて学校というところはもつともつと、本気で子供に目を向けていかなければいけないということを感じました。

ごく最近あるお母さんから聞いた話では、これは本当に一例だと思うんですけど、「うちの子は学校で絶対に水泳をやらない」と言うんです。なぜか。なかなか言わなかつたんですが、実はやつとある時期になつてしまつたのは、「僕は、あの水泳パンツの形がいやだ」と言つたそうです。学校によつて多少違うかも知れませんが、割と男の子の水泳パンツつて、学校で指定するのは、かなりハイレグじゃないんですけれども、「その形がすごくいやだ」という男の子もいるんですね。思春期ですから、そういうことを大事にする。

だから、民主主義というのは、思想信条の自由だと言うけれども、思想信条の自由の中に、感じ方の自由ということも本当に大事にしなくてはいけないというふうに思つています。

ただ、そういう経験を通して、現在、相談指導学級に身を置いている私ですが、やはり竹内先生のお話でも感じたんですね。あるいは永田先生のお話にもあつたかと思います。

結局、善意でやつたつもりが余計なことを言つちやつたんだなんていうことを、今ハッとして話を伺わせていただきました。

それから、子供を多面的に見る。いろんなところから理解するということでは、私の学級を訪ねてこられる方がいろいろいます。先生方やお母さん方や、あるいはいろんな教育関係の方々が見えますが、多くの方が共通して言われるのは、「本当にこの子たちが登校拒否なんですか」ということなんです。一番驚かれるのは、前の学校で担任だった先生だと思うんです。「あの子が何でこんなに生き生きしているんですか」と言われて、やっぱりそういうところを考えますと、本当に子供というのは学校

で普通に見せる姿というのはごくごく一部なんだなということを感じました。

それからここにはお母さんの方も多いと思うんですが、私は、何年か今の学級についてつくづく感じることは、本当に立ち直るということは、外で見ただけでは判断できないと思います。私の学級で言えば、進路ということがきっかけになつて、それがエネルギーになつて、一生懸命勉強して、それから生き方も新しい生き方で力をつけて巣立つていく子もいれば、進学できた後で再び登校拒否ということもあるし、時間的にはそこまでいかないで、進路が十分に煮詰まらないで卒業していくという子もいます。

でも、少なくとも、子供たちは間違いなくお母さんやお父さんから愛されているんですね。それは子供たちはわかつています。だから、大きく転落するということは、まずほとんどありません。

在学中に性非行に走つた子も複数います。女の子でいます。でも、その子たちは今立派に生きています。

ことしも間もなく卒業式を迎えますけれども、顔つきがグングン変わつてくる。そうやつて巣立つていく子たちを見ていて、私は、本当にやりがいを感じています。

先ほどのどなたかの質問に答える形で、永田先生はお話ししていました。私ももしかしたら相談学級はない方がいいと思います。でも、現実に今動けない子がいて、その子たちにとつて、そういうドラマが幾つも生まれているとしたら、私は、矛盾してしまいますけれども、一日も早く相談指導学級のような施設がなくなることを願いながらも、やはりその子たちと一緒に、その子の人生を一緒に考えていきたいというふうに考えています。

以上です。（拍手）

○林 どうもありがとうございます。

他にご意見、あるいはご質問等ございましたら、どうぞご遠慮なくお願ひしたいと思います。ディスカッショーンの時間は若干ございますので、どうぞ余り時間のことは気になさらずにと言うと言い過ぎなんですが、ご発言いただければと思いますが、いかがでしようか。

○—— 越前さんのお話が一番いいんで、越前さんに。

○菅 どういう点についてもう少し。

○—— 大学ですね。

○林 それでは越前さん、よろしくお願ひします。

○越前 何でもいいですか。そうですね、高校時代にいろんな人と出会って、信頼関係を持てたという話をしたんですけども、父親との関係というのが中学時代、どうも父親とうまく話ができるないということがありました。先ほど養護学校のときに記録を書いたというふうに言つたんですけども、それをきのう見ていたんですけども、やっぱり父親と関係がうまくいっていないということが、どうしても父親が私を避けているようなどころもあつたし、私も父親を避けているなどいうどころがつて、結構そういう記録がきのう読んでいると残つていたんです。

定時制に入つて仕事をするようになつて、いろんな働いている人を自分も目の前で見て、自分も働いてみて、そういう外の人との信頼関係というのもそこですごく体験できたんですけども、初めて働いている父親との高校時代私は見ることができたのかなと、すごく感じています。

ですから、最近、今、愛知の方に行って、たまに藤沢に帰つてきて、父親と会うのが一番楽しみです。高校で働いて、外の人といろんな信頼関係ができたということもよかつたんですけども、父親との関係も、働くことで何か父親の存在というものが改めて自分も実感できたなということが、すごく、そういう意味でも働けたというのは、私はよかつたなと感じています。



受験のこととか、結構あると思うんですけれども、私は大学は今二部なんですけれども、一般入試で入つていませんで、社会人入試というのがありまして、定時制高校へ行つている人とか、あるいは一度社会に出た人のための入試というのがあります。それを使って入りました。結構そういうところが最近ふえているかと思うんですけれども、そういうチャンスも利用してみたら、またいいんじゃないかなとうふうに思います。

以上でいいですか。

○林 どうもありがとうございました。

ほかにご質問ございますか。特にございませんようでしたら、菅先生に少しお伺いしたいんですが、先生のお話の中に、「この子がこんな立派な青年になつたのは、一度も学校に行かなかつたからではないか」というようなことがあつたかと思います。もちろんこれは文学、創作上のお話しですから、実際には先生は教育実践をずっとなさつてきたわけで、決して途中で逃げたわけでも何でもないと思いますけれども、現在の学校にもしか先生として注文され

る点といいますか、望む点というか、それがございましたら、ぜひそれをお願いしたいと思います。

○菅 もう既にパネラーの先生たちが学校についてはいろんなことを言っていらっしゃるので、私はちょっと角度を変えて、不登校的な気分から学校に対してかなり強い関心を持つに至った、そのきっかけについて話したいと思うんです。

制度としての学校、例えば先生がいて、建物があつて、教科書があつて、それから授業があつて、というようなことって意外と大したことないんだと敗戦の前後から私は実感するようになりました。つまり、そういうこと以外に学校というのはものすごくメリットがあるんだ。行ってみると、広い空間があつて、そこにたくさん自分と同じような年齢の友だちがいて、それで何か適当なことをやろうと思えば、結構適当なことができる設備がある。その上公立の小・中・高であれば、お金も比較的安い。

つまり、何かそういう払つているお金に比べて、実際に自分がその気になれば、そういう制度としての学校以外に随分いろんなことができるんだということを、ある時期、私は悟るんですね。それがちょうど登校拒否から回復した時期と非常に重なつている。

中学の二、三年ぐらいからそうだと思ひますけれども、それが上にいけばいくほどそういう自由度が自分の中で高くなつていつて、例えば大学のときは、私は理学部の物理学科というところを出まして、物理の先生になつて、実際物理を越前君にも教えてきたわけです。でも、例えば大学のときはに何にうつつを抜かして、いたかというと、実は学生演劇なんですね。学生演劇の作家だつたわけです。

それで卒業して、何年かたつて岸田戯曲賞なんでもらうわけです。そうすると、大学の物理の学生である自分と、学生演劇の作家であつた自分と考えて、その後の三十何年的人生、例えばそれは大部分は教育に費やしてきたんだけれども、それにとつてどつちが意味を持つかというと、圧倒的に学生



演劇の作家ですね。物理の先生なんていうのは、大學の物理を出るということは、資格は確かにもらいました。それがなきや教えられないんだけれども、だけども、それは私は高校時代に物理や数学が得意だつたわけだから、そのレベルの知識で十分高校生の指導ぐらいできるわけです。大学の物理学科をやつたからといって、それがえらい今の高校生に教える物理にプラスになつたかというと、そんなことはないんで、少し頭のいい高校生の優等生が同級生を教える方がはるかにうまいかも知れない。

だけど、学生演劇で実際に自分が作家で、みんなと一緒に作品つくりて、演出して、上演してきたということはかけがえのないことで、その後の三十何年の高校教師の中で、何度も何度も私は生徒たちと集団創作、創作ミュージカル、そういうことをやつてくるんですけれども、そういう営みができたというのは、それなしに考えられないんですね。

そうすると、結局、学校というのはそういうふうに自分の方が、制度としての学校を利用しながら自分たちの人生の学校をつくるんだと。どうもそれが

ポイントだ。そのことが実感できれば、不登校とか、何とかという気分は全部吹っ飛んで学校が楽しくなる。

多分、越前君も、そういうふうに私に言われば、なるほどと思う節もあるんじやないか。私はあなたを観察してひそかにそう思っているんですけれども、どうですか。いや、答えてもらわなくともいいけれどもね。彼が伸び伸びしたのは、彼の中でそういう気持ちの変化があつたんだ。定時制の中でそういうことがあつたんだろうというふうに想像します。

○林 どうもありがとうございました。

## 閉会

○林 若干時間は超過いたしましたが、シンポジウム「不登校をめぐって」、さまざまな角度から貴重な論議が伺えたと思っております。

教文研といたしましては、最初の教育シンポジウムということになるかと思いますが、不登校の問題というのは、一度のシンポジウムで終わるという性質のものではないと思います。今後もこのような機会を設けまして、さらにさまざまな角度から検討を加えていきたいと思いますので、皆様方もぜひ積極的にご参加いただくことをお祈りして、今回のシンポジウムは一応お開きということにさせていただきたいと思います。

先生方、越前さん、どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 本当に第一回目のシンポジウムなんですけれども、こんなに大勢の方に集まつてもらいました

て、また、神奈川県下の親の会の方も多数ご参加のことで非常にありがとうございます。

きょうは、たまたま二月二十九日に行つたんですけれども、別に今後も四年に一度しかやらないということではありませんので、来年度からも回数をふやしていきたいと思います。

きょうのご感想がありましたら、受付の方に袋を用意してありますので、入れて下さい。

また、ここにいらつしやる先生方の半数以上が県の教育文化研究所の教育相談にかかわつておりますので、詳しい相談事がありましたら、ぜひ相談室の方にお電話下さい。

では、本当にきょうはありがとうございました。

再度、壇上の先生方に拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

気をつけてお帰りください。

—閉会—

## 参 加 者 感 想 文

- 不登校をめぐり、根本的な子どもの立場になつて考える一時があつてよかつたと思います。目に見える部分でとらえがちですが、見えない心の部分に焦点をあてられた話など、また、実際に不登校になつた人の話など興味深く聞きました。
- 大変アットホームな雰囲気で話がすすんでいました。越前君の登場もよかつたと思う。ご苦労様でした。
- 色々なご意見を聞かせていただきとてもよかったです。お話を聞いた時は、そんなんだ、もつとそのままの姿をうけいれてやらないとと思うのですが、毎日顔を見ていると、気にさわることも多く、ついつい私の方が不機嫌になつてしまい、深く反省しています。
- 小学校の養護教諭です。学校現場では聞きにくい（？）お話を聞くことが出来て、大変勉強になりました。今日のお話では、「学校に行きたくないなら行かなくてもいいじゃないか」というようなことがあります。私が母親になり、自分の子どもがそうなつた時は、そう考えるかな（そう考えるだろう）と思いましたが、やはり学校現場にて、今の立場でそう考えることは少し逃げているのかなとも思います。不登校の子どもにはお話のあつたように接しても、私としてはやはり「なぜ学校に来れないのか」を真剣に真っ正面から子どもとつきあい考えていかなければと思っています。
- 自分の教育のあり方を深く考える機会になつた。特に竹内先生の話には説得力があつた。私たち教師は、このような話を聞く機会が多ければ多い程、毎日の教育実践をふり返ることになると思う。でも、自分やまわりにいる教師を責めてばかりいる必要もないと思う。竹内先生の言われた「子ども

もを見る」という作業を私たちは決して怠ってはいらないと思うから……。

□ 今日は、お疲れさまでした。

- ・相模原でやりながら、相模原の動員が少ないよう思う。

- ・会場内のキーンという高音が耳ざわり、マイクの調子が悪く聞きづらかった。  
しかし、すばらしい先生方のお話を聞けて、いい勉強になりました。本当にありがとうございました。またこれからもよろしくお願ひいたします。

□ 来年度より永田先生と同様の仕事をさせていただくことになりました。自分自身、小中学生の頃より漠然と頭の中にあり、教師を志し、不登校といわれる子どもたちと関わっていきたい、一人でも多くの子どもに小さな喜びを沢山味わえるよう手助けしたい、という気持ちが、十年目にして実現できる状態になり、結局は実践していかないと見えないと見いつつ情報が欲しく参加しました。教師然としないで、同じ土俵で理解を深めたいと思います。私も中高校時代に登校したくなくて息抜きをした（単発ですが）一人です。誰もが表出度合いが違うものの、覚えがあることと確信しています。ありがとうございました。

□ 不登校の子どもたちと関わっている者の一人として、竹内先生の精神医学の立場からのお話に納得できる部分が沢山ありました。越前君の話の中には、子どもたちとお母さんたちと一緒に過ごす中での自分自身を問われるものが沢山提示されていましたように思う。

- ・今日の案内のチラシを頂いて、シンポジストの人達がどうして先生（教師、医師）ばかりかな？という感じがしました。不登校の子どもたちに、学校以外で関わっている人たちの話から、違った側面を考えるのもよいのではないか。
- ・永田実さんのおっしゃるように、公・民間わず、子どもにとつてよい場を作つていきたいと思

ます。

・会場からの質問の機会がなかつたのは残念。

□ 勉強になりました。また参加させて頂きます。(教師)

□ 小六の一学期、坐つていると変な気持ちになつてくる——と自分のことを語つてくれた越前君もそうだが、人のことをせめない、変な気持ちにさせる教師やら学校があるので、決してそれをせめない、その事実にいつも心を動かされます。私自身横浜の相談学級を担当していますが、子どもたちの生き方に心うたれます。学校での評価はほとんど「1」の中で、自分の進路を決めていきます。真剣に、深く生きている子どもたちに負けられないと思っています。何をしているかなどといわれると、何も答えられませんが、子どものひたむきさを、学校現場にどう返していくか、考えていくことを思つています。

□ 今日はありがとうございました。不登校の子、そうではない子、どの子にもその子一人一人を認める、寄り添うことの大切さを学ばせて頂きました。親の生き方が問われる(頭の中ではわかつているつもりなのですけど)時間でした。

□ 大変よい内容であつたと思います。パネラーの方々の選出も適切であつた。次回も楽しみにしています。

□ 特殊学級の教師をしておりますが、自分の子供の同級生の親御さんや同僚からの相談を受けることがあります、今日のシンポジストのお話をぜひ聞かせてあげたいと思います。(今日は都合がつかなかつたので)「学校に行くことが立ち直る」とと考へていた認識を変える、とても有意義な半日でした。ありがとうございました。

□ 相模原で親の会をやっています。越前君のお話、とても希望をもたせてもらいました。竹内先生、

菅先生、永田先生、皆さんの「心の健康が傷ついた」人たちへの暖かい眼差しを学ばせて頂きました。世話人として、暖かい眼差しを忘れずにつみたいと思います。

□ 四人のシンポジストのお話は、どれも（教師として）身につまされる思いで聞かせて頂きました。

教組としても、ぜひ継続的なシンポジウムや討論会、学習会などを父母とともに、きめ細かくやつてほしいと思います。

運営のこと……四人のシンポジストの話のあと、休憩の後すぐに質疑にはいつて、より多くの人との討論をした方がよかつたと思う。ややまのびの感あり。

□ 本日講演の先生方は、児童に対し非常に理解のある方々だと思います。学校の先生方が、このような認識であれば、不登校になることもないと思います。うちの子の小学校では、給食から忘れ物をしないことにいたるまで、不必要と思われることまで競争の乱用で、児童にとつて居心地のよいところではないようです。子供の訴えも教師の態度や教育方針に関することばかりです。つきましては、学校の現場の教師の方々にもこのようなシンポジウムに参加して頂き、理解ある先生方の考え方を聞いてほしいと思います。

□ 三人のシンポジストの専門の話、また実際に不登校になつた方の事例を聞くことにより、我々大人が広い心をもつて児童に対応していかなければならぬことを痛感しました。

□ 今日は、たまたま着席したすぐ近くに、大変さわやかな雰囲気が感じられる青年がいました。その方が後で紹介されお話を伺つた越前さんです。何も語らなくても『さわやかさ』をかもしだす人つて今までそんなに出会つたことがありません。人間が人間らしく育つことができにくくなつている世の中です。自らを育していくきっかけとなる人との関わりや、いろいろな体験の場を作る重要な

さを強く感じました。シンポジストをはじめお話をくださった先生方のメンバー構成もよかつたと思  
います。とてもいい時間でした。ありがとうございました。

□ 越前さんへ

思い出したくないとても苦しいことをお話ををして下さってこんなにうれしいことはありません。  
参加して本当によかったです。

中学校の養護教諭です。不登校の生徒も多数おります。また、回復され高校や社会に出て元気に  
働いている方もおります。その子たちに「どうしてなの? どうしてだつたの?」などとあつかまし  
くは聞けません。こんな形で思い切ってお話ををして下さつてありがとうございました。どうぞこれからも今ま  
での越前さんでいらしてください。

□ 越前さんの体験を通して、自分が単純にイメージしていたものと大きく異なることにびっくりし  
ました。生半可な知識を持つてはいるだけの関わりがどんなにまざいものであるかを知られ、自分  
の思考の転換が最大課題だと痛感しました。

□ 今日は、不登校の生徒のお母さんと息子（四歳）と二人できました。いろんな話を聞かせて頂き、  
ためになりました。「予防」という言葉が頭から離れません。どうしたらそうできるのか、現場の教  
師は悩みますが、彼（体験した越前君）に励まされているようにも（ガンバレヨ）思います。でも  
子どもにどう伝えていいのか、ガンバリが負担になってしまっているのではないか、とも  
思います。教師なんて、と思ってやめるのは簡単ですが、やめてはやっぱり意味がない。今の時代  
教育現場で、そういう矛盾だらけの中でどういう教師であるのが必要なのか、今日のシンposium  
で少し教師の安らぐ“時”があつたような気がします。ありがとうございました。  
いろんな人たちに、今日の話をして欲しいと望みます。不登校の親・教師だけでなく。

□ 登校拒否の経験者本人から、その時の心情や当時の親に対しての気持ちを聞いたのは、全く初めてだったので、とても参考になりました。これからも、もつといろんなタイプの登校拒否・不登校・怠学の経験者自身の話を聞きたいと思う。私自身、親として我が子が学校に行かなくなつた時、とてもあわててしまい、自分の仕事（教師）もあるしということで、何としても子供を学校へつれていこうと、たいたいたりおこつたり、口ぎたなく言つたりしました。しかし、それがかえつて良くなかつたと今になつて反省しています。（長引いてしまい）一年生入学まもなくから、六年生、今年卒業しますが、まだ続いています。

□ 不登校を始めた児童を持ち、子ども・親とかかわりを持ちながら悩んでおります。（子ども自身の悩み・苦しみにはとうてい追いつかずですが）そんな中で、自分が考えたり思つたり行動していたことが、実はまさしくやつてはいけないことがばかりだつたと、思い知られ、グサッと心につきささりました。今後、どのようにして、いつたら良いか、手間どつていますが、とにかく、また子どもを中心にして、力をそえてあげられるようになりたいと思っています。（一教員）

□ 現在中三（女子）、中一秋から登校してない。学校からはほとんど連絡はありません。よくわかっていない学校から何かうるさく言われるよりもましと親は考えている。娘は何も言わないがさみしいと思う。担任の先生は、かかるには時間が足りない（忙しい）と思われているかもしれない。子供の言葉で言えば「わかるのが恐いからわからうとしない」（先生に対して言つたのではありません）のかもしれません。

学校に行かないことイコール（×）から始まっているので、先生とじつくり話したくても、接点が見つからず、お互いにヘラヘラして終わり……のムナシイ関係。卒業に際し、何か形のあるもので成長を表わさないと留年（卒業させない）と言われた。何か、とっても変ですネ。子供本人のこと

を真剣に考えてくれてるの？教育ってなに？と思う。うちの子とつき合ってごらん、素晴らしいですよ。確実に成長しています。

相模原で、このようなシンポジウムを開いてくださったことに感謝致します。

□ 小二の男の子が不登校をしています。甘ったれですが、親にべつたりという程でもなく、ただ、はつきりと答えがないと納得できないところがあります。学校へどうして行かなくてはならないのか、なぜ勉強を学校でしなくてはいけないのかと、みなで同じことを同じようにしなくてはならないことに対する疑問を、小二の子がわかるようく説明できない親としては、子供の成長を待つだけです。個人個人のケースバイケースですが、まわりに対する子供の盾になつている親としては、心強いお話をでした。

□ 私は、川崎市の小学校教員であり、また、中一の半年間不登校し、その後相談指導学級から今年卒立ち、単位制高校に合格した子供を持つ母親でもあります。二年前のその当時と比べても、ずいぶん、教文研のような官立(?)の相談機関も意識が変わつて来たようです。不登校児が増えてきた社会状況からそつならざるをえなかつたのでしょうかが……。でも、教育を日々行つてゐる学校現場は、いまだに意識変革が出来ていません。特に母親が何か言つてくれば強固な壁を築くのが学校です。私は、自分の勤務する学校で、教師たちの偏見の中でたたかっています。また、行政の方たち遅れが残念です。相談センターのカウンセラーもいろいろな考え方の方がいらつしやるし、教師の関わりも非常に下手です。いま、もつとも正しく不登校をとらえているのは、不登校児の親たちです。もつともと、母親の声に耳を傾けるべきです。

□ 小学校五年生の三学期から不登校になつて今中一年。この頃はずいぶん元気になり休み始めた頃のことをポツリポツリと話しありました。その中に、担任の先生からの自分を認められなかつたこ

とが大きなショックだったことを言つています。社会での一番初めに出会う方が先生ということを考えると、お互に理解しえなかつた人に出会うのは大きな不幸だと思います。

いつも思うのですが、このような場に参加するたびに思うのですが、我が子の学校の先生方も、このような所に参加し、私達のような子供達に手を差し伸べて下さればいいのにと思うのですが……。養護の先生に、先日雑誌「こみゅんと」を差し上げたら「このような本を読むのは初めてなんですね！」なんとおくれてのこと。担任の先生は、「進学は無理でしょう」ばかりを言います。もっと、子供の未来を見てほしいと感じて、残念です。身近にこのような先生とお話しできる機会があればいいのですが。

□ さまざまな立場からの意見がとても参考になつた。またこういう試みを行つてほしい。

□ ついつい目先のことにとらわれすぎていることを知りました。日頃の対応の仕方を大きく反省しています。今日の企画、本当にありがとうございました。

□ 最後の昔さんのコメントにもありましたが、えーとボクは現役の不登校児（とよばれています）でございます。ボクとしては、学校を交流の場として利用（というと言葉がキツイのですが）したいと思つていました。なにしろ、あれだけの場所や人の集まる機会はなかなかないと思ひますから。ところが残念なことに、そのせつかくの場所はどうも閉鎖的なようで、ボクが相談指導学級を、自分のやりたいことのできる場として利用しようとした時、お上の方からストップをかけられてしましました。手続きをとるよう言われ、時間がかかつてしましました。（不本意だったのですが）現役の不登校、また、生徒の生の声をくみ、もつと開かれた学校になればと、行政にも伝えたいですね。（中三女子）

□ 学校に行けない子供でも自立出来、今一生懸命頑張っているのを聞き、大変安心しました。不登

校児を持つ親の気持ちは皆一緒である事とわかりました。

このような場所にもつとたくさんの中堅の現役の先生が顔を出して、学校側の対処の方法を勉強してほしいと思います。

□ 現在私は「ホスピスをつくろう」という市民運動を通して、死について考えている。

竹内氏が言わされたように、「見えないもの（心）を感じられるかどうか」が、今の教育に問われている大きな問題なのだと思う。親、教師ともに、子供の声を聞いて欲しいと思う。肉親の死を正面から受けとめるというような形で、「死の準備教育」を考えて欲しい。

□ 湘北で初めて教師関係の不登校の問題をとりあげた公開シンポジウムが開かれたのは大変うれしい。湘南のように、教師と親の交流会を継続的に続けていくことで、不登校も含めて、今の教育のあり方、学校のあり方を共に考えしていく機会を持つことを。

□ こういう場へ来ない先生方に勉強していただきたいことばかりでした。

□ 登校拒否体験者の話（体験談）特に中学教師（管理者を含み）が参加してほしい。

相模原市として主催してください。毎月でも、親の会を招いて実施してください。

□ 不勉強で、来るのに時間がかかり、半分ぐらいしか聞けず残念。今後も開催を期待します。

## まとめにかえて

神奈川県教育文化研究所の主催したはじめての公開シンポジウム「不登校をめぐって—子どもの心を探りよりよい対応を考える」は、一九九二年二月二十九日(土)相模原教育会館で湘北教育文化研究所・相模原教育会館の共催、神奈川県教育委員会・相模原市教育委員会の後援を得て開催された。

今回、その報告が神奈川県教育文化研究所ブックレットとしてまとめられるにあたって、司会を担当した者として、もう一度このシンポジウムをふりかえってみたい。

今回のシンポジウムの内容については、このブックレットに述べられている通りである。当日の話からの内容的な変更はなく、司会者・話題提供者・指定討論者の言葉の重複や話言葉的な表現などを読者が読みやすいように一部書き改めただけである。したがって、シンポジウムの雰囲気はこのブックレットからも十分に伝わると思われるが、以下、簡単に特徴を紹介したい。

公開シンポジウムは様々な自治体や民間団体などで多数実施されているし、内容が不登校に関連するものも少なくない。そのような中でも、今回のシンポジウムは全体にあたたかい雰囲気があり、教育現場や医療現場で長い間不登校児とかかわりを持った先生方の経験が話の随所に現れている点で意義深いものであったと思われる。

さらに特筆すべきことは、話題提供者の菅龍一先生の定時制高校教師時代の教え子で不登校体験を持つ越前さんに特別に参加していただき、彼の体験やそのときの悩みを直接伺うことができたことである。シンポジウムの感想の中にも述べられているが、たいへんさわやかな好青年である彼が語る

重い言葉に、司会者を含めた会場の参加者は非常に深い感銘を受けたのである。それとともに、教育においてよき師と出会うことがいかに大切かも改めて教えられた。菅先生との出会いがなければ今の彼はなかつたかもしれないし、われわれが彼の体験を共有することもなかつたのである。

不登校児という言葉には暗いイメージがつきまとい、一般の人々は特別な子どもを連想する場合が少くないようと思われる。だが、現実の不登校児は必ずしもそうではない。かれらの中には、現在の学校や社会が持つ問題に敏感に反応してしまい、その個性が学校環境に適合しにくいだけという子どももいるのである。越前さんの話を聞いて、改めてこのような感を深くした。

それとともに、竹内直樹先生の話された「心のひび」という言葉も心に残つてゐる。われわれは、不登校児が持つ心のひびに対して、もう少しやさしく理解ある眼差しをむける必要があるのでないか。一見怠惰で何も考えていないようでも、かれらにはかれらの深い悩みや苦しみがあるのである。

永田實先生の四半世紀にわたる不登校児とのつき合いを踏まえた話も、興味深いものであつた。不登校児が家庭訪問をした先生に述べたという言葉、つまり「今まで悪いけど先生を試していたんだ。来ててくれてるので、それは仕事だから来ているんだろうと思つていた。」を聞くと、子どもは教師や親のタマエを鋭く見抜いていることがよくわかる。そして、ホンネのいえる関係を非常に強く求めていることも、同時に示されているのではないだろうか。

シンポジウムの進行については、フロアとのディスカッションの時間が少ないなどの問題があつた。また、教師や医師以外の立場、たとえば親の側の意見が十分に取り入れられていないという構成上の問題も指摘できるであろう。このような点については、次回以降の公開シンポジウムで改めて問直すことにしたい。

最後に、このシンポジウムを開催するにあたつてご協力をいただいた関係者の方々、会場に参加さ

教文研教育シンポジウム記録

**不登校をめぐって**

—子どもの心を探り、よりよい対応を考える—

1992年6月1日

発 行：神奈川県教育文化研究所

横浜市西区藤棚町2-197

神奈川県教育会館内

☎ 045-241-3531

印 刷：(有)神奈川教育企画

☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN